

合同本

排潤物化



この作品はフィクションです。  
実在の人物・団体・事件とは  
一切関係ありません。

---



合同本

排潤物化



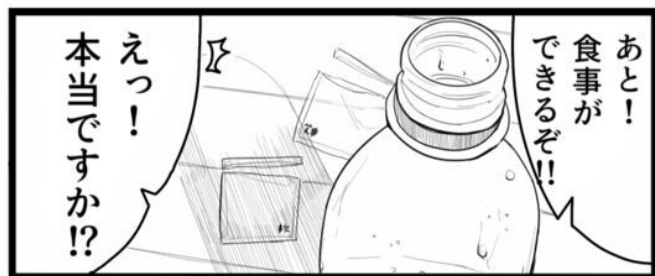
# 目次

|          |    |      |
|----------|----|------|
| かんやん     | 漫画 | p. 5 |
| 節山伏      | 漫画 | p.17 |
| クズ。      | 小説 | p.25 |
| こじか      | 漫画 | p.35 |
| かんやん     | 小説 | p.47 |
| 龍乃鳳樹     | 漫画 | p.57 |
| 奈々澄      | 漫画 | p.59 |
| 四尾連あんな   | 漫画 | p.65 |
| ほうじ茶プリン  | 小説 | p.67 |
| 安堂 捺     | 漫画 | p.77 |
| るりょうりに健山 | 漫画 | p.85 |

表紙：かんやん

編集：安堂 捺

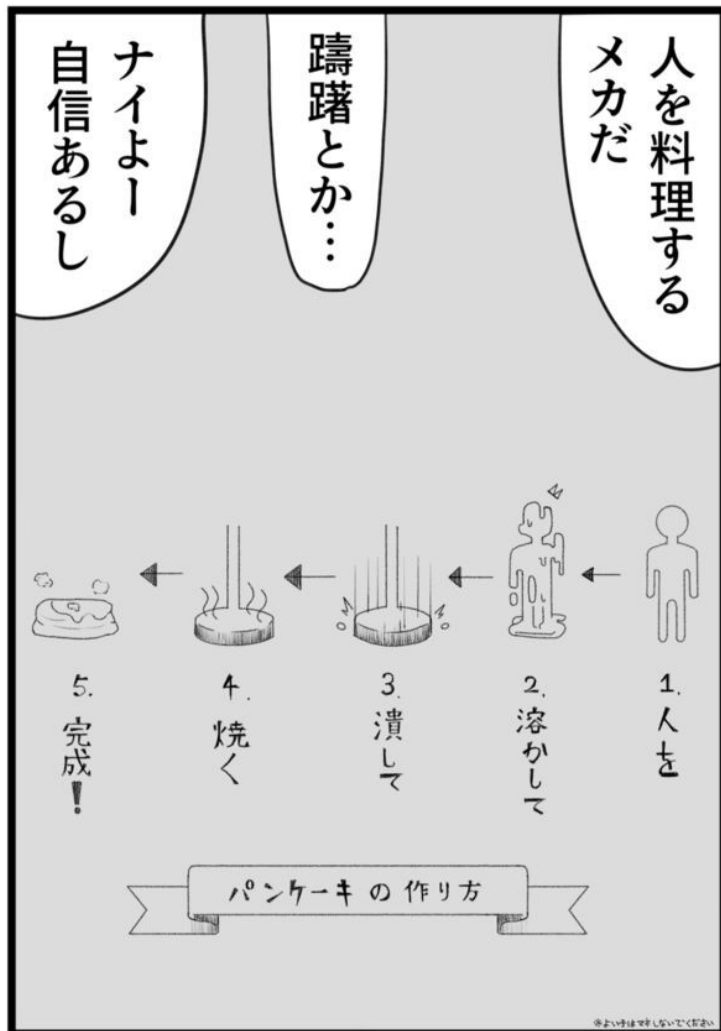


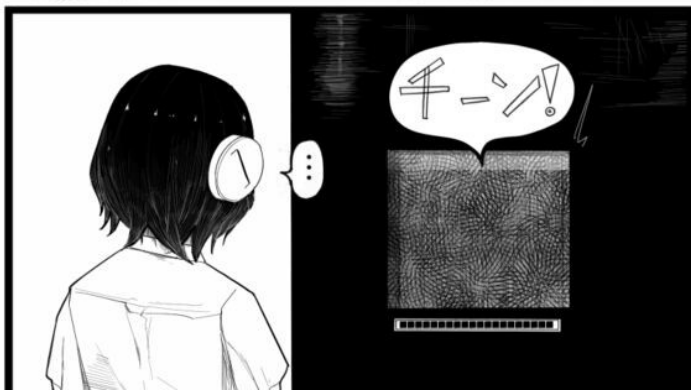
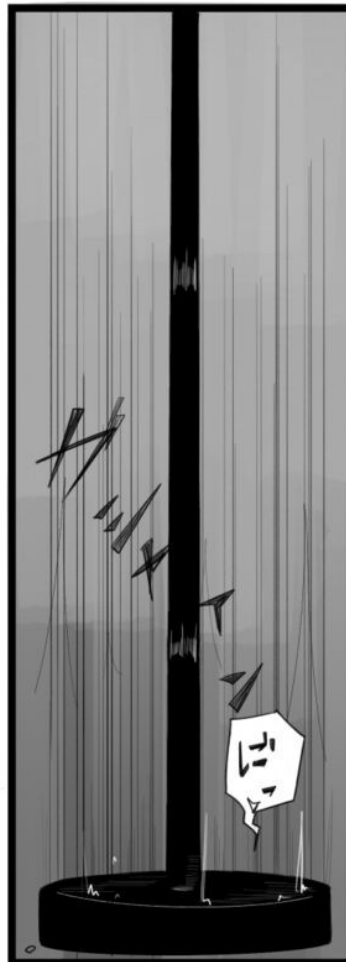
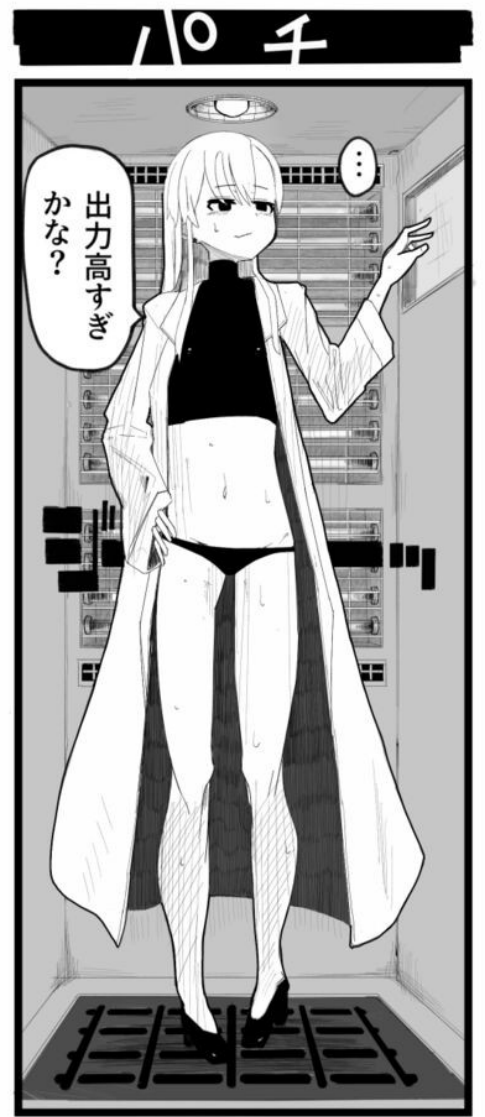
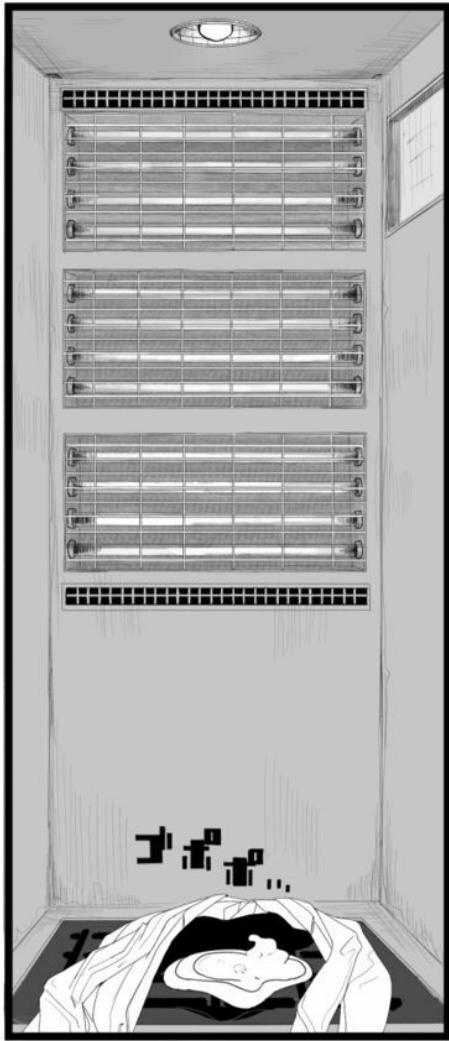


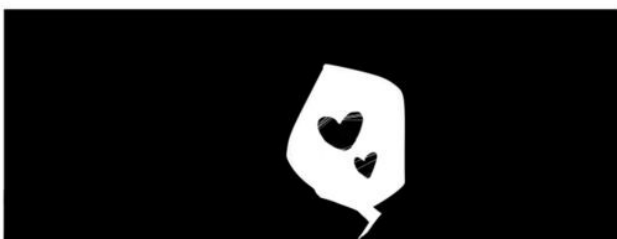
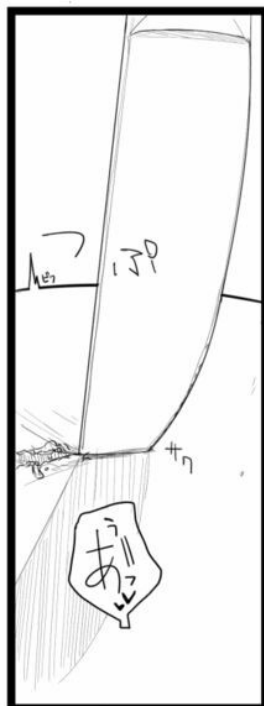






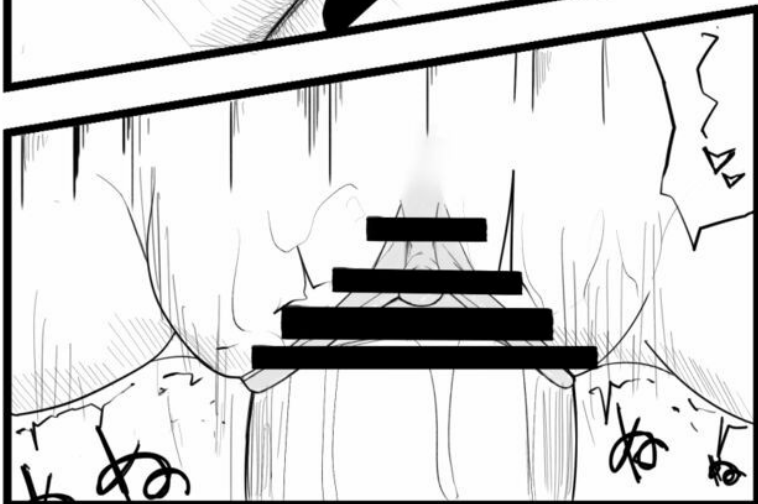
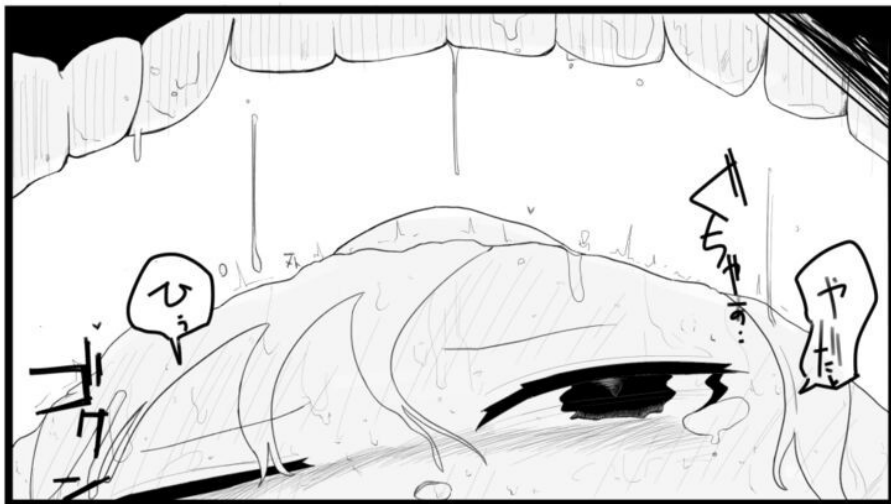






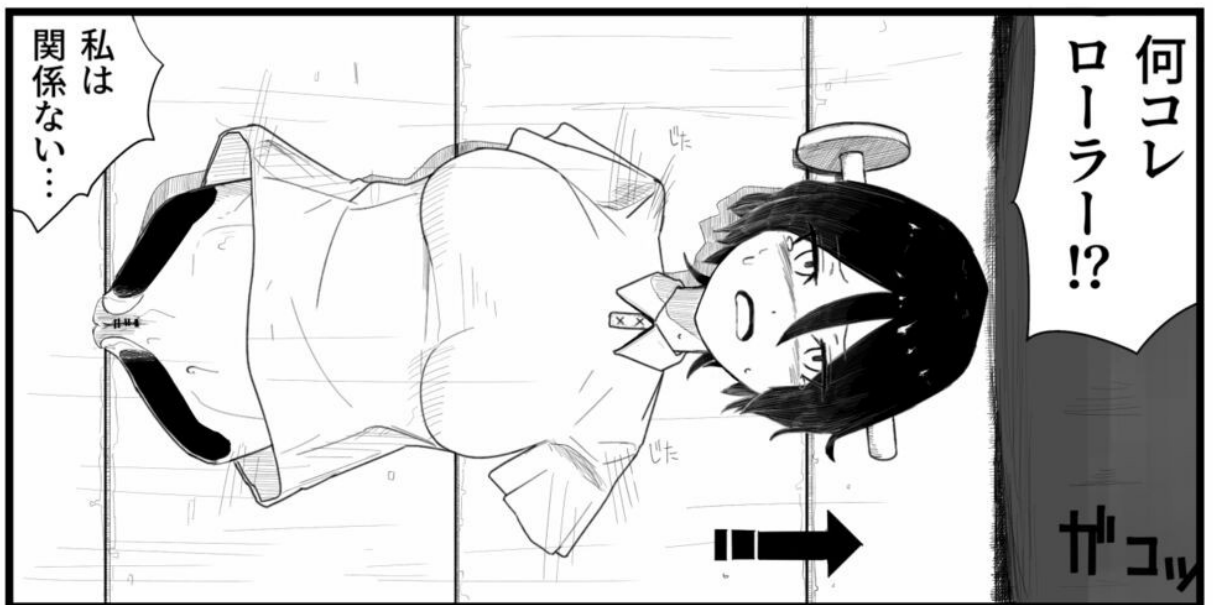
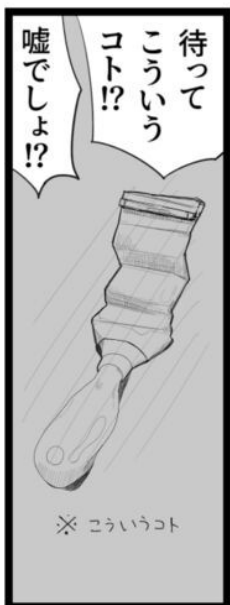


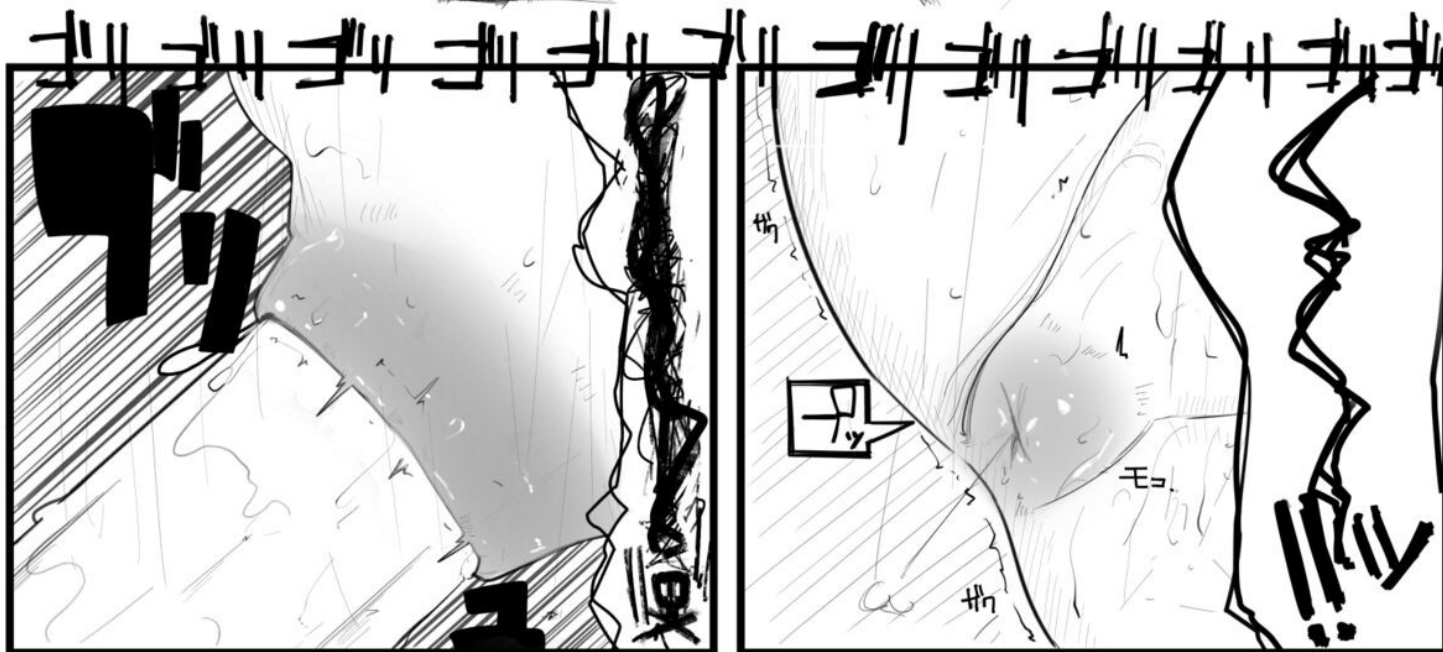
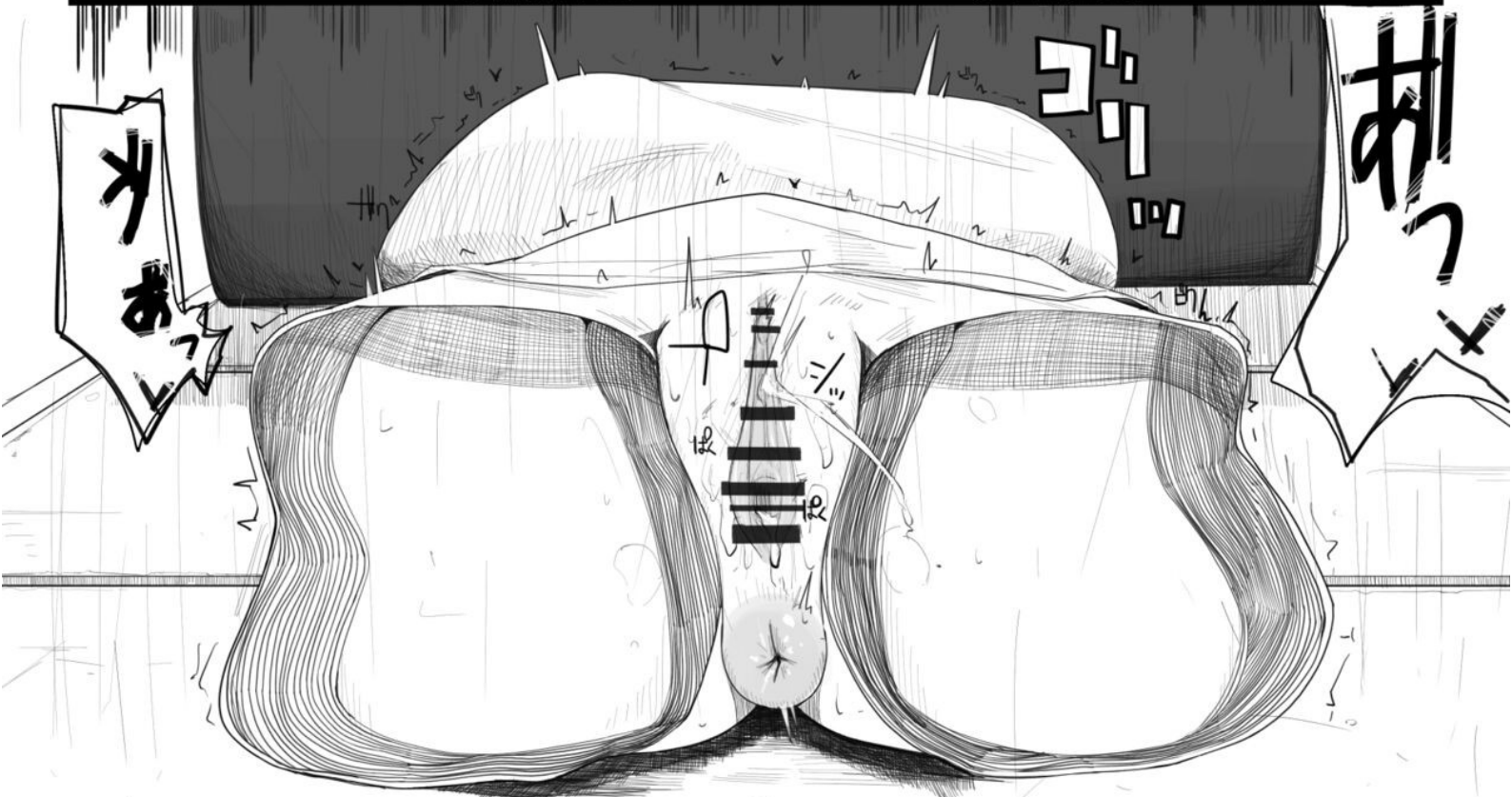






30分後









し 死んじゃう…

ダメ…



私 なんて  
生きて…

へ  
た  
ー



ホラ  
満更でもないって  
言いたまえ

柔くなったって  
言っただろ？

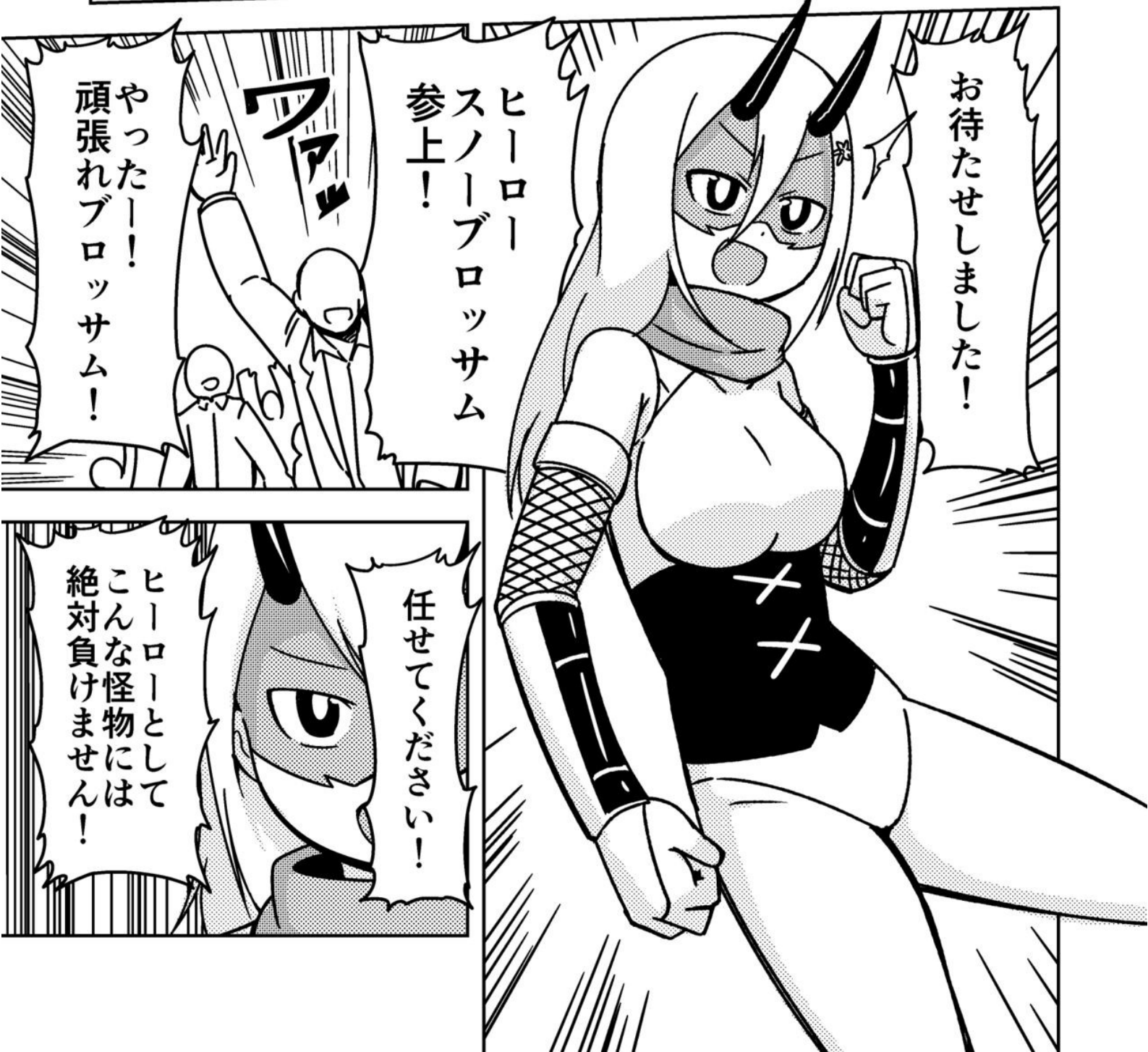
おしまい



怪物だーッ！

逃げろ！  
食われるぞ！

助けっ…



お待たせしました！

ヒーロー  
スノーブロッサム  
参上！

やったー！  
頑張れブロッサム！



任せてください！

ヒーローとして  
こんな怪物には  
絶対負けません！



グウッ…  
グウッ…!

バタ

グウッ…!  
ブッ…ウ…!

バタ

バタ



くそっ!  
何がヒーローだ  
期待させやがって  
雑魚がよ!

ブロッサム!



グウッ…!  
グウッ…!

あいつが食われてる  
うちに逃げるぞ!

ムル



ぐっ…  
こんなところで  
諦め…

ぐっ…んっ…  
ううっ…!  
ンン…っ!?

もっ

ぐっ…駄目…!  
締め付けが…  
強すぎて…!

どんどん  
飲み込まれっ…

ジュルッ

ジュルッ





!?

あ...熱っ...!

な...何...!?  
毒...

腕を動か...

負けるな!  
動かないと!

だ...駄目だ...!  
このままじゃ  
マズい...!

えっ…あっ…

私の腕…  
溶かされっ…

違っ…体中っ…  
嘘ドロドロにされっ…

やだっ…!  
やだやだっ…  
殺されるっ…  
死んじやう…

んひいつ♡





ダメっ…  
ダメダメっ…!

このままじゃ  
頭まで溶かされ…

殺されるっ…  
死んじゃう…

三

なのにい…

あ

なんでこんなに  
気持ち良…いひっ

もつとドロドロに…  
包んで…溶かしてえ…  
ダメなのにい…

わたし…  
ヒーロー…  
らのにい…

プル…





ド

イツっちゃ...

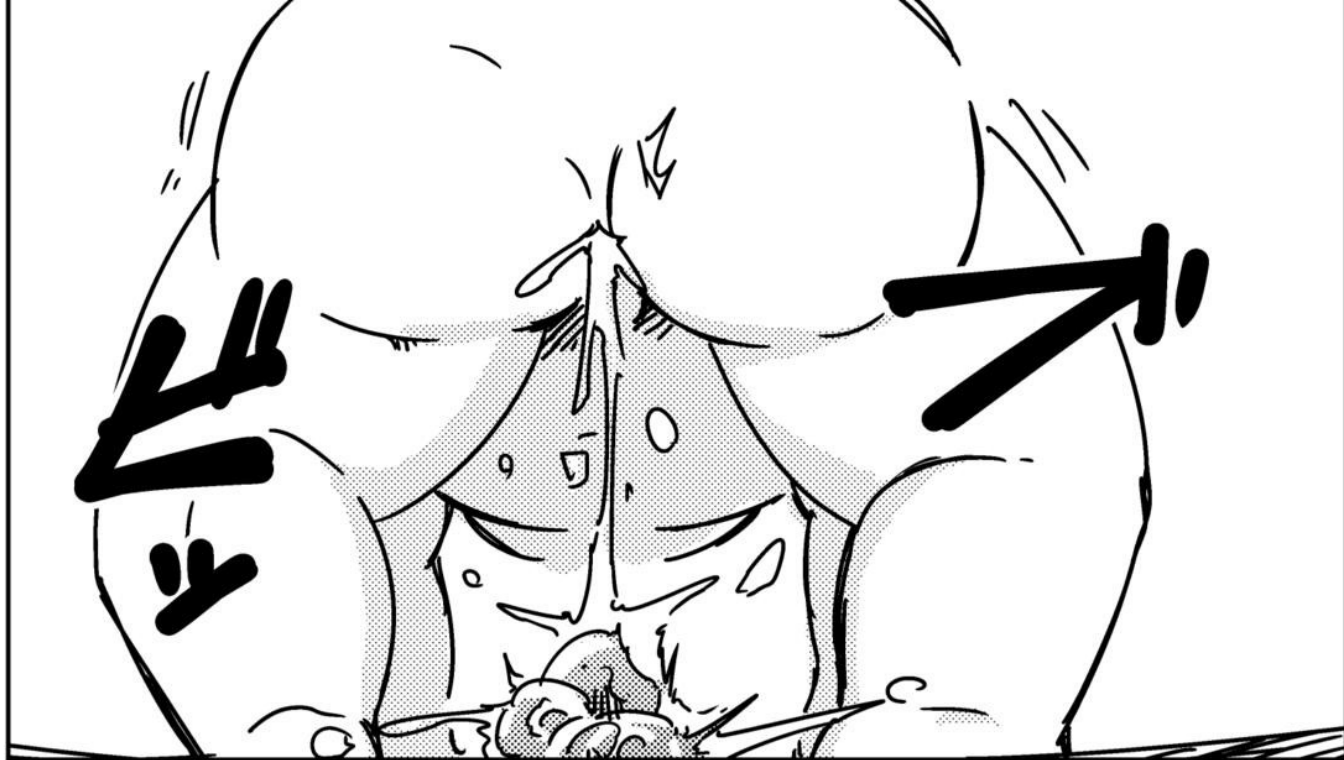
グ

グ

グ

グ





ハナツミ

クズ。

魔法が全てを支配する国。産業から文化まで、生活に至る所に魔法が関わるここでは、持てる魔力や技量がその人物の評価に直結している。

そんな国にも、魔法と関わりの薄い分野は存在する。産業なら、例えば花農家。花の特性に合わせた環境さえ整えられれば、魔法を使わずとも可能な仕事である。だが魔法が全てのこの国において、そういった仕事は低階層のものとして扱われており、稼ぎも決して良くはない。

自分の農園兼店舗を一年ほど前から持ち始めたティファ・ブリッグスの生活も、ゆとりあるものとはいえない。だが魔法力に乏しいながらも、花が大好きで細やかかつ丁寧な管理を根気強く行える彼女にとって、花農家の仕事は天職と言えるだろう。

そんなティファの下に、国の憲兵が訪れたのは突然のことだった。

思わぬ客人の到来にティファは困惑した。罪を犯した覚えなど無かったし、よからぬことを企てているわけでもない。

い。また、並以下の魔法力しか持たない自分に、何らかの依頼が来たのだとも到底思えなかった。

だが彼女には一つ、思い当たる節があった。花と同等かそれ以上に愛している、三つ下の妹・ニナのことである。

天賦の魔法の才を持ち合わせていたニナは周囲の期待通りに成長し、修学過程を終えた今は国の平和を守る兵士として勤務している。さらには若くして実績という名の華を積み重ねている、まさに絵に描いたようなエリートだ。

真紅の髪を揺らし、エリート街道を突き進むニナ。そんな妹を持ったことで、凡才のティファが苦痛を味わったことは少なくない。幼い頃から、周囲は事あるごとに二人を比べてはニナを褒め称え、比較対象にされたティファには軽侮の目が向けられてきた。

また不幸なことに……才覚のみならず、頭髪も妹とは正反対の青髪であるティファには、「本当に姉妹であるのか」という疑問まで持たれることもあった。自分たちを産んだはずの、両親からですら。

だが子供時代には妬みを抱えていたものの、今のティファはそのことでニナを恨んだりはいない。むしろ最前線で活躍し、国や人々のために戦う優秀な妹のことを誇りに思っている。

だからこそ、ニナの身に何かがあったのではないか——  
——と心配し、ティファは憲兵たちに尋ねようとしたのだが。  
「っ!？」

憲兵の一人が放った失神魔法が、ティファから意識を奪い取ってしまった。

「っ……ここ、は……?」

どれほどの時間が経ったのか定かではないが、ティファは意識を取り戻した。

ごつごつとした岩肌が視界に映るところを見るに、恐らく洞穴の中なのだろう。薄暗い空間を灯火がほのかに照らす中、じめじめとした不快な湿度にティファは顔をしかめる。

そして、彼女の表情を曇らせた理由が、もう一つ。

(なんで、こんな罪人みたいな扱いを……?)

拘束魔法をかけられた上、ティファは仰向けの姿勢で浮遊させられていた。これは凶悪な犯罪者を搬送する際によく使われる方法。拘束や運搬に器具を頼らず、最も信用に足る魔法という手段が使われる辺り、「絶対に逃がしはし

ない」という意志が感じられる。

「気付いたか」

ティファをどこかへ搬送していく四人の内、一人の男が彼女の目覚めに気付き、続けてこう呟いた。

「目覚めぬままであればよかったものを……」

「な、何なんですか……? いきなり——」

「口で言うより、見た方が早い」

男には質問に答える気が無いらしく、首から下は身動き一つ取れないティファは、もう口をつぐむ他無かった。

ガンッ、という音が聞こえてきたのは、それから数分後のこと。

(な、何……!?)

首を可能な限り起こし、音の発信源である進行方向に目を向けるティファ。

その視界に入ったのは魔法陣の一部分。魔道障壁と呼ばれるそれは、囚人などを捕らえる檻として使われることが多い代物である。そして聞こえてきたのは、捕われた何者が魔道障壁に弾かれた音のようだ。

ティファはすぐ、捕縛された者が人ではないことに気付いた。僅かながら障壁越しに、真紅の鱗を纏った巨体が暴



れているのが見えたからである。

凶暴な魔物を仕留めきれず、ひとまず動きを封じているのだろうか――。そう推測したティファは次の瞬間、こんな場所で覚えるはずのない感覚に目を見開いた。

（この魔力は……ニナの……！？）

魔力というのは、成長や熟練により増大はすれど、性質そのものは産まれた時から変わるものではない。

だからこそ、ティファは混乱した。小さな頃からよく知るその感覚が、進む先の魔物から放たれていることに。

「意識があるのなら、説明しておかねばな。もう見えているだろうが……あの太蛇がニナ・ブリッグス中尉。お前の妹だ」

絶句するティファに、男は続けて事の経緯を説明した。

「この洞穴は、国家転覆を企てる犯罪集団のアジトだった。その計画を未然に防ぐこと、そして組織の殲滅を任務として、彼女は最前線で戦った。だが、主犯格が最後の悪あがきで繰り出した呪いを受けてしまい、あんな姿に……。見ての通り、魔物に変じてからは理性を失っているため、今はこうして閉じ込めている」

説明の間にも、頭を障壁に打ち付けている太蛇。その眼差しがやって来た人間たちを敵視し、障壁を打ち破って襲い掛からんとしていることは明白である。

「そん、な……」

ティファは狼狽えていた。あの凶暴な魔物が、誇りに思う最愛の妹――。男の話、そして自分自身で感じ取った魔力からも、それは逃れようもない事実である。

また、魔物の姿のまま障壁に捕らえられているということは、今に至るまでニナにかけられた呪いを解く手段が見つかっていないことを意味していた。

（……？）

だとしたら、妹はどうなるのだろうか――。想像したティファの頭に疑問符が浮かんだ。

もし呪いを解く方法が無いのなら、ニナは人々の害にかなり得ない。閉じ込められている現状が示す通り、理性を失った凶暴な太蛇を手懐けることなど、不可能であるのだから。であれば、もう処刑する他無い。

しかし、そうなると……憲兵たちが自分をここに連れてきた理由が分からない。処刑に際して説明はあるかもしれないが、魔物化したニナをわざわざ見せつけるようなことはしないだろう。それもこんな風に、厳重な拘束をかけてまで。

「ブリッグス中尉は我が国にとって、優秀で貴重な戦力。しかし彼女にかけられた呪いは、術者の死と怨念で強まっている。普通の手段では解呪出来ない代物だ」

「しかし……一つだけ、この呪いを解く方法がある」

ティファがここに連れてこられた理由を悟ったのは、憲兵の口からそれが語られるのとはほぼ同時だった。

「呪いを受けた者の親か子、あるいは兄弟姉妹を……食べさせることだ」

「なっ——っ!!」

大蛇に足を向けた仰向けの姿勢から、頭が大蛇の方を向くうつ伏せの姿勢にさせられるティファ。変わり果てた妹と初めて正面から向かい合う形となった彼女は、その巨体に絶句した。

窮屈な空間に閉じ込められたその全長は四メートルを超えており、ニナ本来の背丈の倍以上。威嚇するように開かれた大きな口を見るに、人間一人を丸呑みすることなど容易だろう。

(ニナを元に戻すために……私を……!?)

「妹を通して国の役に立てるのだ、名誉に思え」

憲兵の呟いた言葉は、この国の在り方をよく表している。『魔法』という絶対的指標の前では、平等などあり得ない。強者が生きるためには、雑多な弱者は容易に切り捨てられてしまう。

……ティファは初っ端から詰んでいた。憲兵が農園にやつて来る前、呪いでニナが魔物に変じた時点で。あるいは、

優秀過ぎる妹が産まれてきたその時に。

腹ばいの姿勢で障壁の手前に着地させられてなお、未だティファの拘束魔法は解かれていない。一方、彼女を連れてきた憲兵たちは、危険から逃れる為に大蛇とその姉から大きく距離を取っていた。

「二、ニナ——」

ティファは一縷の望みにかけようとした。姉である自分が訴えかければ、もしかしたら理性を取り戻してくれるのではないか、という奇跡に。

しかし……満足な猶予も与えられないまま、憲兵により障壁が解除された。

「——っ!?!」

猛然と迫りくる大蛇の顔。待ちわびた獲物を前に爛々と光る眼。そして、開かれた大口と牙が見えたのを最後に、ティファの視界は真っ暗闇に閉ざされた。

「んぐっ……!!」

大蛇の大口は、姉の上半身を収めた所で一旦閉ざされた。それとほぼ同時にかけられた拘束は解除されており、ティファの動きを縛る魔法は無くなったのだが。

(牙の、毒のせいなの……!!? 動けない! 出ているはずの、

足でさえ……!)

大蛇の毒牙は、口を閉ざした際にティファの背中辺りを掠めた程度。それでも、その神経毒は姉の全身をあっという間に麻痺させてしまった。

では、魔法はどうかという。

(これじゃ、詠唱も出来ない……!)

見た目より細く、狭い蛇の体内。その肉壁に口を抑えつけられ、ティファは言葉を発することもままならない。

そして、魔術に秀でているわけではない彼女は、この状況を打開するような無音魔法を体得していなかった。

(何か、何か出来ることは無いの……!?)

焦りと恐怖に陥る中、無情にもティファの身体は少しずつ、奥へ奥へと押しやられ……遂には。

(あっ……!)

足の先まで妹の中に入ってしまった彼女は、反射的にその両足を前に持って行き、身体を丸めて踏ん張る姿勢を取った。

結果、歪な膨らみが生じる大蛇の身体。その捕食物を奥へと送り込まんと、大蛇はその場で暴れ始める。

(くうっ——っ!?)

大きな揺れに苛まれる中、こんな「声」がティファの頭の中で響いた。

「苦、しい……!」

(ニナ!)

聞こえてきた妹の声に、再度訴えようとするティファ。しかし。

「早く、押し込ま、なきや……!次は、あいつらをお……!」

その声の主は、ニナであってニナではなかった。

身体だけでなく、精神まで魔物のそれと化している彼女にとつて、人間は敵であり食料。だから、仲間であるはずの憲兵たちを次のターゲットに据えるのは当然であり……飲み込まんとしている人間が自分の姉であることは勿論、自分に人間の姉が存在すること自体、認識しないことである。

そんな妹の状況を悟ったティファは。

(……違う。あなたは化物なんかじゃない。私の大事な妹。だから……!)

揺れに抵抗するのを止め、腹の中へと押し込もうとする流れに、その身を放つことを決意した。

現状を打開する術も無い自分が抵抗した所で、ニナが無駄に苦しんでしまうだけ。それに、もしティファが助かるとすれば、憲兵以外の誰かがやって来て大蛇を切り裂く、だなんて出来事が起きた場合のみだろう。

ティファはそんな僅かな可能性に賭けるつもりにはなれなかった。そして何より、妹の死によって自分が救われることを望みはしなかった。

（これが、最後の魔法……上手くできるか、分からないけど）

抵抗を解くと同時にティファが試みたのは、保護の魔法。それも、自分ではなく大蛇に対して。人体を消化・吸収することによる負荷が、万が一にも妹のダメージにならぬように。

ただし、無音での発動は試すのも初めて。ティファ自身もその効果に期待するというより、やらなかった後悔を残さぬためのものである。

（……大人しく、なったわね——ううつ）

暴れるのをやめたのか、揺れが収まった大蛇の体内。ティファの身体は少しずつ、奥へと運び込まれていく。……全身に、消化液を浴びせられながら。

（……あれ、指先の感覚が——そっか、溶けちゃったんだ。……ああ、花たちの世話、誰か見てくれるかしら……）

指の消失に大した感想を抱かないばかりか、ティファは痛みに呻くでもなく、この期に及んで自分が育てている花の心配をしていた。

そうさせている要因の一つに、大蛇の麻痺毒が挙げられ

る。神経に侵食したその毒は肉体の運動だけでなく、痛覚を含む感覚や思考にも影響をきたしているのだ。

もう一つの要因は、ティファの行使した保護魔法である。成功に確信を抱けなかったその魔法は、ちょっとした奇跡と呼べるほどの大成功を収めていた。対象に指定した大蛇だけでなく、ティファ自身の命に対しても効果が及ぶほどに。

ニナの体内に宿る膨大な魔力が寄与したのか、妹を思う姉の優しさが引き起こしたもののなか。いずれにせよ、そんな奇跡が起きていることにもティファは気付いていない。（じ、じわじわと、小さく……）

泡を伴いながら溶けていくティファの身体。手足における感覚の消失は、指どころか肘や膝にまで及んでおり、胴体や頭部も少しずつ、薄く小さくなっている。

（何かが、くつついて——く、臭っ……！）

消化液に晒されてベトベトの全身に付着したのは、妹の肉壁にこびりついていた腐敗物。自らの肉体と引き換えにするには、あまりに些末な代物である。

一方、彼女が纏っていた衣服も消化液により溶けていた。しかし、その繊維は不要と判断されてか吸収はされず、ドロドロに溶けゆくティファの肉体と混ざり合い始めている。そのポケットに入っていた、植物の種もろとも。



そんな地獄のような、通常であれば生命活動の維持など不可能な状況で。

(なのに、気持ちいい……もう、身を預けなくなる程に……！)

保護魔法の大成功と痛覚の極端な鈍化は、ティファの生命活動と意識を持続させるのに留まらず……ぼんやりと伝わる融解の感覚を、心地よいと感じさせていた。

その一方。この上なく順調に消化される捕食物に対し、大蛇は。

“もっと、もっと早く……！”

(うぐうつ！？♡)

より迅速な消化を求め、その肉壁でもって消化物にプレスをかけた。

(つ、潰され……んむううつ！♡)

それは一度ならず、何度となく繰り返され……その都度、消化物は体内を進行しやすい形状に成形されていく。養分を妹に与え、報いとしての快樂に悶えながら。

(手も足も、無くなっちゃったあ……もう、どこがどこかも分からな——つつ！！♡♡♡)

もはや“それ”は、生命体と呼べるような代物ではない。痛みや快樂を感じられるだけの意識など、とっくの昔に消え去っているはずのモノ。

それでも、付着した腐敗物と混然一体となってもなお……姉の魂は消化液と熱、そして圧迫がもたらす快感を味わい続けていた。

“……うつ、がつ——ああああああ！！！”

大蛇が激しく暴れ出したのは、歪な膨らみが完全に消失してからすぐのことだった。

「な、なんだ！？」

「まさか、失敗したのか……！！？」

距離を取って見守っていた憲兵たちがざわつく中、激しくのたうち回る大蛇。やがて、その腹の辺りの肛門から。

(お、ぐおつ……♡♡♡)

メリメリッ、と一本の円筒が排出され、ポトリと地面へと落ちた。

そして。

「しゅ、収縮していくぞ！」

四メートル超えの真紅の巨体が、見る見るうちに縮んでいく。それと並行して、一本線だった肉体には膨らみが発生し、肩や臀部となったそこからは手足が伸びる。

裂けた口や鋭い毒牙からも、迫力が消え去って行き……数分後、そこには真紅の髪を持つ人間の女性が横たわって

いた。

「ブリッグス中尉！」

「う……こ、ここは……？」

駆け寄ってきた憲兵たちに揺り起こされ、ニナは目を覚ました。

「わ……私は、何を……っ！て、敵の残存勢力は――」

「安心したまえ、全て終わった。もう、大丈夫だ」

大蛇から人間に戻った反動からか、消耗している様子のニナ。そんな彼女を落ち着かせるように憲兵の一人が言うそばで、他の一人が自分の上着をニナの肩にかけた。

「……何故、私は裸に……？」

「……細かい話は回復してからにしよう。今は中尉を無事に帰還させることが先決だ」

彼女が魔物化していたことをはぐらかそうとする、そんなやり取りが行われている一方で。

（よかった……ちゃんと、戻れて……）

妹の様子を見守る「それ」を、二人の憲兵が見やっていた。

「あれって……まさか……」

「ああ……色からして、そうとしか思えんな」

頭髮、衣服、肌の名残が色素として残る「それ」が、大蛇に捕食させた花農家の、ティファ・ブリッグスの成れの

果てであることに疑う余地はない。

「どうします……？念のため、完全に消滅させておきましようか？」

二人の内、若い方の憲兵が上官に尋ねる。彼は、花農家の怨念が「それ」に宿っていることを危惧していた。ニナを大蛇に貶めた呪いが、敵の死に際に放たれたことで強まったように……自分たちへの復讐心から、予想外の攻撃をしてくるのではないかと。

「必要ないだろう。ああなる前に息絶えたに決まっている。怨念が宿る危険性があるとすれば中尉の体内だろうから、彼女を検査する必要がある。しかし……」

上官は、地面に落ちている「それ」に蔑みの目線をやりながら、こう続けた。

「ただのフンに万が一にも怨念が宿った所で、我々に対して何が出来ても無かろう」

そう。色こそ特異ではあるものの……排出元であった蛇のような細長い形状が、地面に落ちた反動でぐにやりと折れ曲がった「それ」は、紛れもないフンである。人間に戻る上で必要な養分を妹に提供し、不要物を押し付けられた残滓……文字通りの鼻摘みものでしかない。

その魂は、養分を搾り取られた肉体が汚物になり果ててなお、消滅することは無かった。それが彼女の、最後の魔

法が起こした奇跡の結果である。妹を思う優しさが自らの死をも防いでしまい、最期を排泄物として迎えることに繋がったのだ。

「さあ、引き揚げよう」

結局、大蛇の排泄物を放置したまま、その場を後にし始める憲兵たち。

その一人の背中に担がれたニナは、その時になって初めて、青混じりの大きなフンの存在に気付くも……疲労感からか、すぐにその瞼を閉じた。

そしてその場には、ティファだったモノだけが残された。  
(寒い……)

熱を帯びた体内からの排出と同時に開始していた、高温な空気による冷却。それに伴い、消化のもたらす快感で興奮していた意識も、落ち着きを取り戻している。

(私はここで、朽ちていくのね……っ?)

その寒さに震えることも出来ないまま、自らの行く末を悟っていると……汚物と化した自身の中に、衣服の繊維ではない何かが混じっていることに気付いた。

(種?……ごめんなさい。こんな、陽も当たらない場所に連れてきてしまって……)

ポケットの中に入っていた種は消化液に直接は触れておらず、無傷のままドロドロの肉体に埋もれていたようだ。(ここから出してはあげられないけれど……せめて、私に残っている養分を吸い取って。そして、可能であるのなら……)

洞穴の最奥という不適な環境で、強く生きて欲しい——。残りの時間を全てその祈りに費やした末に……フンは人知れず、土と一体化して消滅した。

それから数百年の時が経った今、その魔法の国は存在していない。

新たな文明の波を受容せずに排他的な態度を取り続けた結果、魔法の国は世界から取り残されてしまった。

自分たちの全てである『魔法』が否定されるかのような情勢に、国中で高まる不満。それは国際社会への反発に繋がりが……台頭した過激派を先頭に、世界を相手取った戦争を仕掛けるという事態にまで発展した。

が、ものの数日で鎮圧されてしまい、大国の領土となることを余儀なくされたのだ。

彼らが身分の基準としても扱ってきた『魔法』は、人々の平等を著しく損ねる罪深きものとして禁忌とされ、今ではその脈絡が完全に途絶えている。

では全てが平等となったかと言うと……そうではなかった。『財力』という世界共通の指針が、人々の身分を決める大きな要素として導入されている。

一度は独立すら取り上げられたその国は、魔法の文明が完全に途絶えてからは再びの独立を許された。

国の名称も変わり、完全に生まれ変わったその国だが……唯一、魔法のような現象が息づいている場所が存在している。

かつて、犯罪集団のアジトとしても使われていたという洞穴。その入口は長年の間、そのような用途で使われることが無いよう塞がれていた。

近年、調査のために開かれたその最奥には湿度、つまり水分こそあれど、陽の光など一切当たるはずがない。

そんな場所から、なんとカーネーションのような花が発見されたのだ。それもただのカーネーションではなく、暗

闇の中で光を放つ“青い”品種が。

研究者たちはこぞって調査に乗り出したが……そんな場所でもカーネーションが咲く理由ですら、科学が発達した今も究明出来ていない。その上、違う土壌や環境では全く育たないという特殊性を併せ持っており、現代科学での解明はもはや不可能とされている。

そのような背景から、この青く光るカーネーションには『魔法の花』という異名が付けられた。

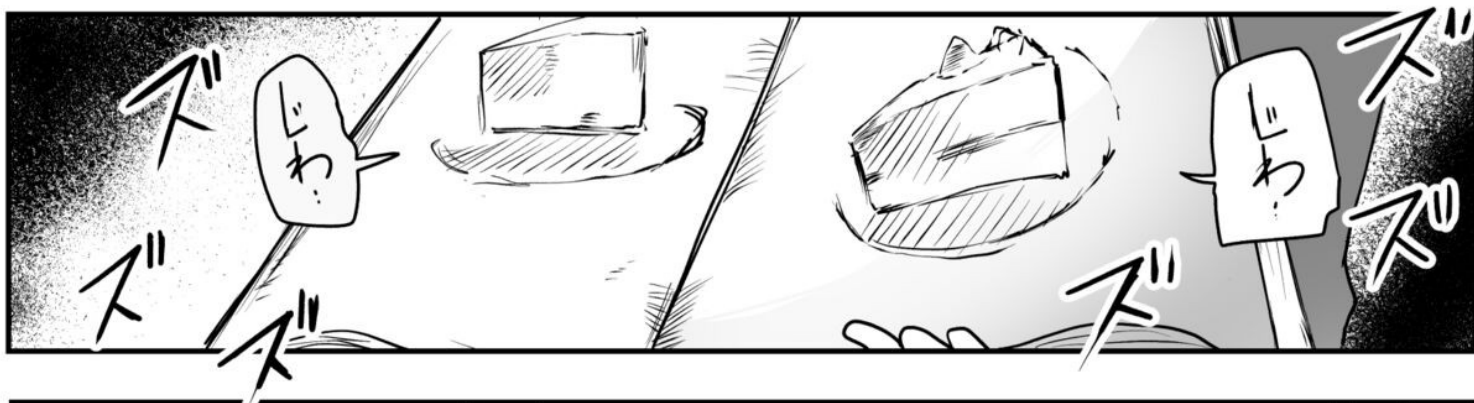
そこでしか咲かない特性故に、摘み取り厳禁である『魔法の花』。その青い光の根源が、国家に摘み取られた凡才の命であり、排泄物であることなど、誰も想像すらつかないことだろう。

今では世界中の人々が訪れる観光資源として国を助けているその花が、かつて国家の犯した罪が咲かせたもの、というのは皮肉な話なのかもしれない。

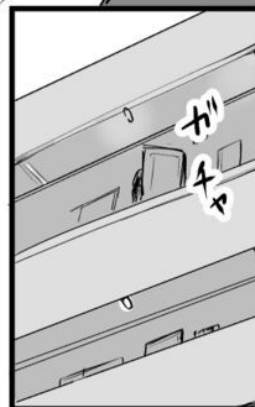
それでも、立派に咲き誇る花たちが人々に感銘をもたらすその光景は、この国にいた青髪の花農家が願っていたものだった。







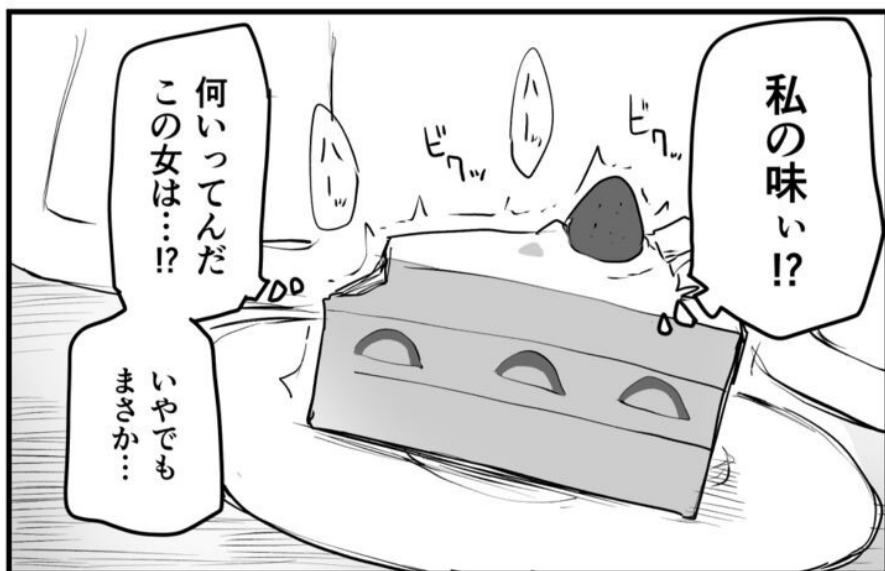
カタン

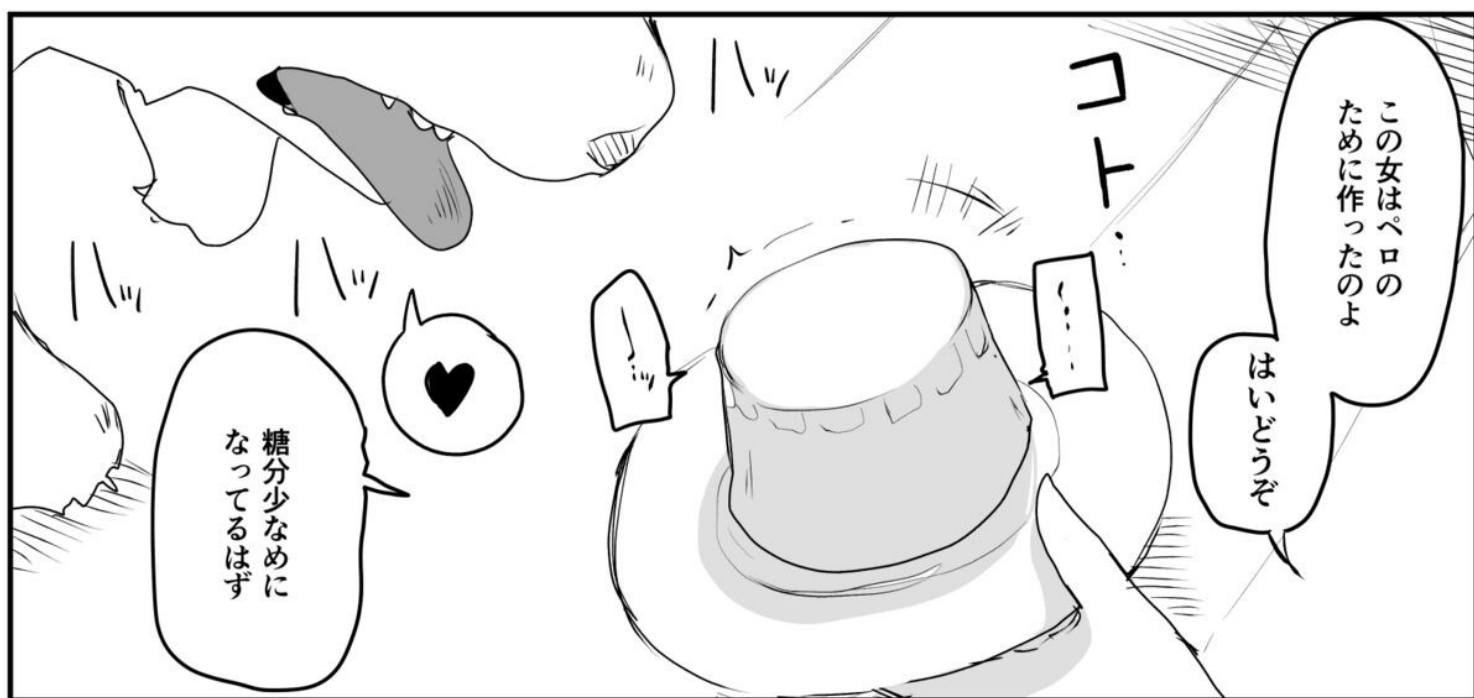
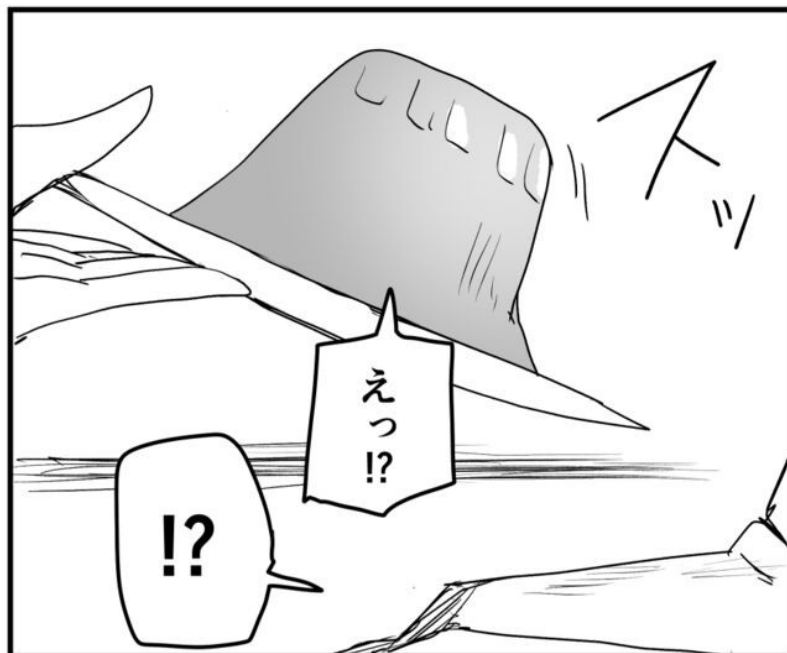


















なんだ…？

……

眩しい…？

うわーでたでた

これが残りの  
雨宮さんかあ

誰だ—？

おかげさまで  
別人のようにな  
ったよ

そばかすも  
消えたし…

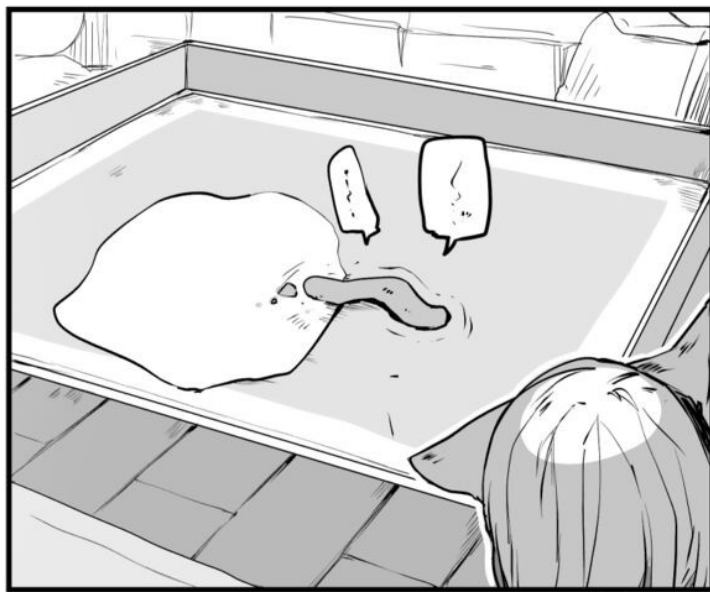
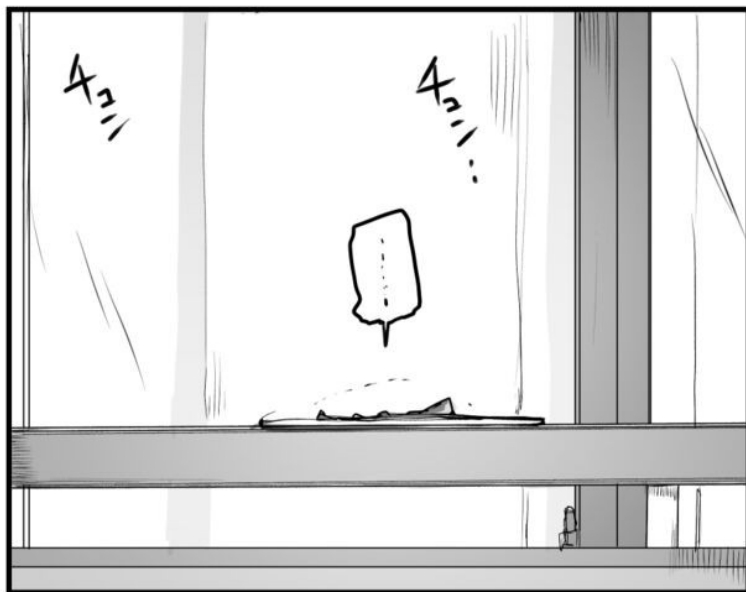
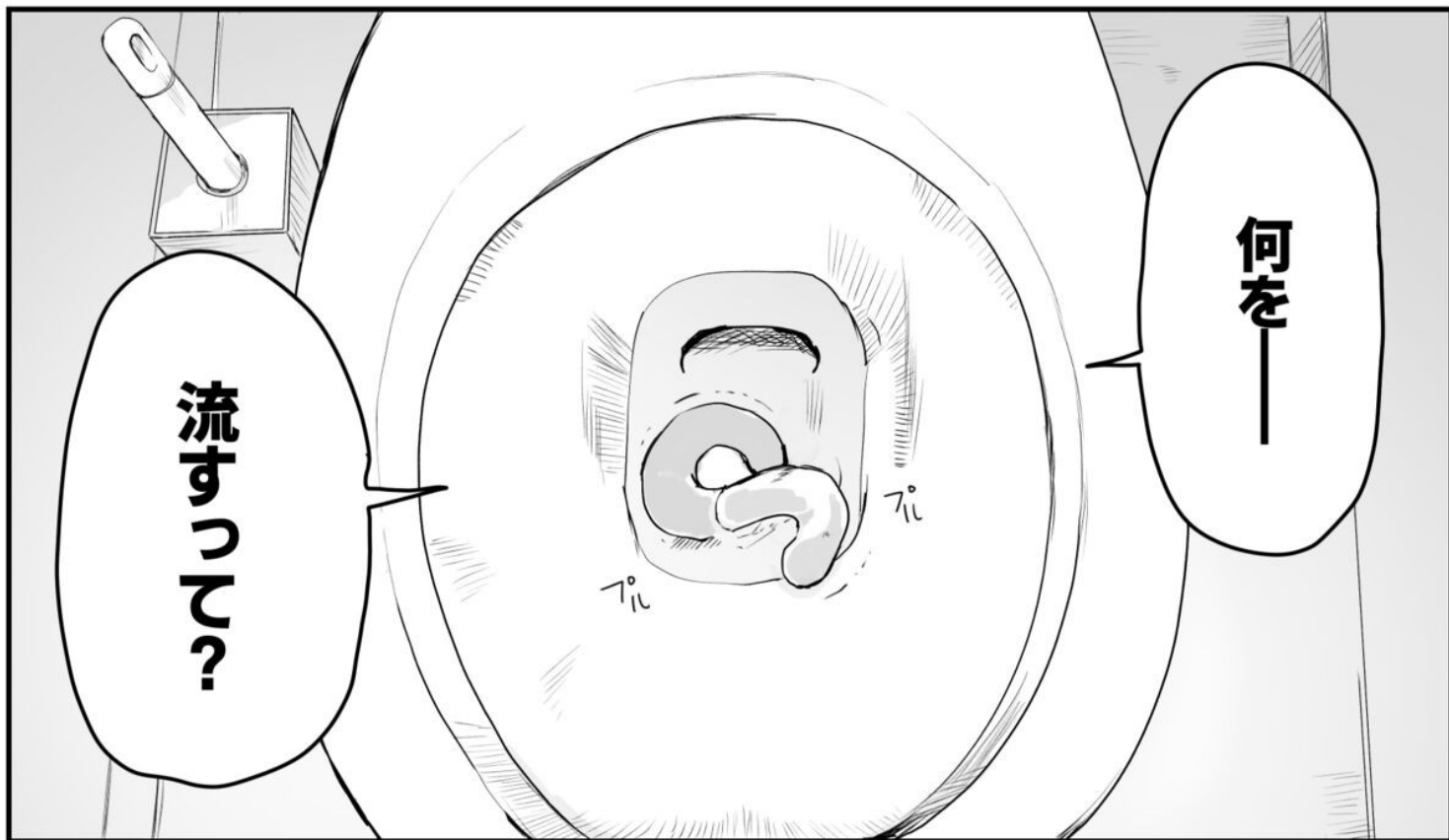
裸眼で目がいいって  
新鮮だねえ

何を言ってるんだ  
こいつは……

いくらこれが  
雨宮さんでもトイレは  
流さないわけには  
いかないし—

そういえば  
ペロのトイレも  
掃除しなきゃな

何だって？



おわり



排泄物化合同本



博物館の女の子が古生代に飛ばされてフンの化石になる話

かんやん

◆姫華 昂（ヒメハナ スバル）

十二月の博物館、ベンチでインスタのTLを眺めている。暖房の乾いた風に巻き上げられた、埃っぽい空気が頬を叩く。とうとう嫌気がさして顔を背けると、窓越しに重い雪がぼたぼた降るのが見えた。つい、ため息を吐いてしまう。帰りたい。バスで三十分、こんな山奥にまで来て何してるんだか。青チャートも三週目が終わり、息抜きに孝行でもするか、と思い立ったのが今朝の事。姪の「博物館に連れてって」というリクエストに応えた私が馬鹿だった。正直、ここまで展示物に惹かれないとは自分でも予想外だ。草花だの宇宙だのもっとマシな企画があつたらうに、なんだ、フンの化石って。苦行もいいとこだ。

加えて、五歳児の落ち着きのなさを見くびっていた。水泳部の部長をやっていた時とは別種の辛さがある。無計画に振り回される、精神的なしんどさ。いい加減面倒になつて、「私はここで休憩してるから」と、ベンチでスマホを見ている次第だ。

「スバルねーちゃん、来て！」

姪は遠くから駆け寄って、有無を言わず私の腕をひっ掴む。これで十回目だ。どうしたの？　なんて笑顔を作る

気にもならない。そして、手を引かれるままにてショーケースの前に連れて行かれる。興味ないよ、とは言えない空気だ。

「うんちの宝石だって！」

仰々しく赤いクッションの上に展示されているそれには、『コプライト』とタグ付けがされていた。お世辞にもルビーやサファイアといった宝石と同種とは思えない、くすんだ茶色で、こぶし大の大きさ。真ん中で切られ、瑪瑙（めのう）のような、歪な縞模様の断面をこちらに向けている。キャプションを読むと、フンの成分がミネラル化して模様を成しているものらしい。

「顔に見えない？」

言われてみれば確かに、模様が顔に見えなくもない。いつぞやのツイッターでバズっていた、木材に封印された犬画像を思い出した。

「あ、わたしはあっち見に行く！」

満足したのか、彼女は私を置いて隣の展示に走っていく。走っちゃダメだよ、そうたしなめようとして、無駄だと悟る。そもそも、平日の午前中に、私たち以外のお客さんがいるようには思えないし、実際誰とも会っていなかった。

「私はお花摘み……トイレに行ってるね」

「わかった！」

元氣よく振り返って、彼女は手を挙げた。手を振り返す。

……行儀が悪いけど、個室で休もうと思う。ベンチだと、また無理やり連れて行かれそう。

逃げるようにその場から離れ、ほの暗い廊下を進む。あと五十メートル先、の表示。流石に広い。げんなりする。

と、ショーケースの間に狭い通路があることに気がついた。なんの気なしに覗くと、奥にはガラス張りの扉があり、そしてその向こうには青々とした木々や植物が茂っている。思わず足を止めてしまう。

「温室？」

扉は半開きになっており、隙間から抜ける風が頬を撫でる。みずみずしく、パサついた肌に優しく染み込むようだ。耳を澄ますと、暖房の吐き出す風に混ざり、木々のそよぐ音が聞こえる。暗く単調な空間の中に突然現れたそれから目が離せない。スタッフ用、ではなさそう。他に入口も見当たらない。正直、どうでもいいフンの展示なんかより、こっちの方が気になる。つまらなかつたらすぐ戻ればいい。……姪っ子連れてきた方がいいかも。いや、しかし。仮に声をかけたとして、うんちに夢中の彼女は嫌がるだろう。どこか私をまた引きずり回し始めるに決まっている。

——いいか、五分くらいで戻れば。

半開きの扉に手をかけた。



——甘い匂いがする。いちごジャムみたいな、甘ったるい匂い。気にはなつたけど、嫌いじゃない。ただ、少し頭がぼうつとする。

温室の中は、想像よりずっと広かった。整備された道ではなく、誰かが歩くことで踏みならされてきた、けもの道という印象だ。周りを見ると、背丈の高い木々がたくさん植えられており、その間をシダ類が埋め尽くしている。昨日まで地学を勉強していたから分かる。古生代の森林を意識したビオトープのようだった。

五分ほど歩いただろうか？ まだまだ温室の終わりは見えそうにない。戻ろうかと逡巡したが、甘い匂いに思考が遮られる。せっかくなんだから、まだ、あとちょっとだけ見ていこう——。

「暑い……」

気温自体は高くないが、湿度がひどい。きよろきよろと辺りに人の気配がないことを確認し、セーターを脱ぎ捨てた。シャツのボタンを開けて、ばさばさやる。蒸れた谷間から熱気が逃げていき、心地よい。スカートも折り曲げて、丈を短くした。……ついでに、ばさばさやった。涼しい。はしたないと後ろ指さされないか、少し後悔した。

でも、こんなに汗だくなのに、何故か心地良い。夏場、

プールから上がった時みたい。足は止めず、奥へ、奥へ。草木は増し、いよいよジャングルの様相を帯びていた。

道は細く、狭くなっていく。生えている植物は見たことがないものばかり。本当に古世代にタイムスリップしたみたい。小さい頃に読んだ、漫画の世界だ。

――涎があごを伝う。気がつく、口が開きっぱなしになっていた。慌てて閉じる。なんだかクラクラする。温室で植物を見に来たはずなのに、どこかおかしい。漂っている匂いを嗅ぐたびに、頭の奥がピリピリ痺れて、思考が鈍る。夢でも見ているみたい。なんとなく動きにくくて、靴と、靴下を、順番に脱ぎ捨てていく。草に覆われた地面は柔らかく、ベッドの上を歩いているようだ。いつの間にか抱えていた靴やセーターはどこかに消えていた。

匂いの源が近い。辺りは木々に覆われて薄暗く、もはや道などない。ここが温室なのか、ジャングルなのか。現代なのか、古代なのか、全く分からない。どれくらいの時間歩いたのかも、腕時計を放り捨ててしまったから分からない。あとちよつと、ちよつとだけ……。

意識が朦朧とする。数秒か、数分か。足は動かしたまま、何も考えられない。暑いのがいけないんだ。シャツとスカートとを脱ぎ、そこの枝に引っ掛けた。帰りに拾えばいい。

自分は冷静だ。何故か鼓動が早い。深呼吸しよう。大きく息を吐き出して、吸い込む。肺の中に甘い香りが充満して、どっと汗がふき出した。我慢できない。小さく見せようと胸を圧迫していた、サイズの合わないブラを外す。男子からだけでなく、女子からも視線を集めて嫌だったけど、ここでは気にする必要がない。ぶる、と大きく震えた。部活を終えて、水着を脱いだ時と同じ解放感がある。

ショーツ一枚のままふらふらと進み、ついに目指していた匂いの源に辿り着く。

それは、チューリップのような一輪の花だった。目を引くのはそのサイズ。私の背丈よりもずっと長い茎は途中で緩くカーブして、釣鐘型の花弁を、私の頭よりも大きなそれを、こちらに向けてぶら下げている。その一方で、茎の根元は小さく、バレーボールほどの大きさだ。

花卉の中心は空洞になっていて、そこからは粘性の高い桃色の雫がとろりと滴っている。

じゅん、と陰部が湿り気を帯びる。クロッチのサテン生地が陰唇に吸い付いた、その感覚が気になった。ショーツに手をかけ、足首まで下ろす。汗ばんだ割れ目の跡が白地にくつきり残っている。止まらない汗を手の甲でぬぐう。

ひどく喉が渴いた。カラカラだ。

生まれた姿のまま、花に寄る。滴り落ちるあの蜜を、身

体が求めてる。穴に頭を突っ込んだ。甘い。びりびりして、舌がとろけそう――。

――瞬間。曲がっていた茎がピンと伸び、花が天を仰ぐように起き上がった。蜜壺の中に肩まで潜っていた私は、逆さまになって持ち上げられる。

食虫植物。そんな単語が脳裏をよぎった。反射的に身体をよじって抜け出そうとするが、つるりと滑るのみ。焼け石に水だ。たまたま今は胸が……あんなに邪魔だったそれがつかえているから呑み込まれずに済んだだけ。時間の問題なのは明白だ。すうっと、血の気が引いていく。そして、我に返る。

私は、いったい何をしているんだ？

「――ッ♡!？」

その質問に応えたのは、激しい絶頂だった。どろりと大量の蜜が周囲から噴き出してきた、それが分かった瞬間に、トんでいた。自分が求めてやまなかった甘い雫は、性的快感を引き起こす、媚薬だったのだ。

全身の筋肉が張り、指先まで伸びる。足を大きく開いたまま、無様に失禁する。あまりの刺激に息ができない。突き出した舌には、甘い味が広がっている。

――そして、ずるりと、私の前身は、花卉に、爪先まで一息に呑み込まれてしまった。

拘束感。呼吸ができなくて、目を白黒させる。細い茎を奥へと飲み込まれているのだ。ずるずると肌が壁と擦れ、滑る音が耳元でこだまする。

「――ぷはあっ!」

数秒の後に、開けた空間に吐き出された。窒息は免れたものの、全く助かってなどいない。視界は一面緑で、先ほど確認した、植物の根本に閉じ込められたのだと分かった。外から見た時はバレーボール程度しかなかったが、今は私の身体に合わせて伸び広がりしているようだ。ただ、広いな、ということはない。ぶよぶよとした壁にパッケージされた状態だ。でんぐり返しの途中で止められたような、お尻を上突き出した姿勢から、ろくに動けない。ラップで包まれた鶏肉になった気分。外の光が透けて見える程度には薄いのに、じたばたと蹴り飛ばしても全く破れそうにない。

と、周りの壁が収縮し、私にまとわりついた。かと思うと、じゅわ、と甘い液体が……先ほど私を絶頂させた媚薬が染み出してくる。指先やつま先に、粘液が絡みつく。

「くう……ッ!」

二度目の絶頂。今度は心の準備ができていた。下唇を噛んで、衝撃に備えて。なおも強烈だった。陰部から脊髄を駆け上って、頭の奥で星が飛ぶ。きつく閉じた目を大きく見開くと、瞳孔がぶるぶる震えた。息が詰まる。強制的に



達せられる、予備動作のない絶頂がこれほど消耗するとは。

壁は広がって、少し余裕ができる。肩で息をして、快感の余韻を振り払う。冷静さを失わないように強く意識した。イッてる場合じゃない。髪にまわりつく粘液を手で払う。

——違和感があった。普段と手の感覚が違う。視線を向け、絶句した。

「……え？」

そこには、指が失われた手のひらがあった。

……いや、無いわけではない。くっついていて。溶けている、というよりも、滑らかになっている、というような表現に近い。指と指の間はなくなって、一枚の板に、つるんとした杓子みたいな形に変わり果てている。かろうじて残っていた凹凸を粘液が伝って……そして、すうっと凹凸は消えた。

——消化液。それは、媚薬などではない。身も心も溶かす、ただそれだけのモノだったのだ。

そして。壁は、私にそれを塗りたくろうと、再び収縮を始める。

「う、うわあああっ！ やだ、嘘でしょ！」

迫り来る消化液から逃れようと、身体を体操座りのように小さく丸める。これは悪手だった。離れたらその分だけ壁は迫ってきて、より早く消化を進めるだけだったのだ。

「いや、あ、ああ……んぐうッ！」

三度目。視界がフラッシュして、がくがく揺れる。体操座りの手が解け、そして圧縮され、溶かされ、滑らかに。膝を折り曲げた状態で、ふくらはぎが太ももにくっつき、太ももは横腹にくっついた。前腕と二の腕は折り曲げた状態で合体して、そのままおっぱいと一緒の塊になった。潰れたカエルのような姿。

——もう、どうしようもない。そんな声が聞こえた気がした。助からない。「嫌だ」呟いたが、返事はない。心臓が揺れる。壁が迫る。

四度目。今度は、ぎゅううつ、と指圧よろしく四方八方から揉み込まれる。締め付けるだけだった先程までとは異なり、段違いに心地よい。小刻みに喘ぎ、それから達する。達して……それから、止まらない。ずうっと、揉み続けられたまま。消化液を染み込ませようとしている、そんな意図が伝わってきて恐怖した。そして、その効果は靦面（てきめん）だった。手足と胴体が一体化する。首が消え、顎と乳房がくっつく。一本の円柱のような形に、私は滑らかにされてしまう。顔があって、胸があって、おへそがあって、性器があって、お尻の穴がある。それらが並んだ、いびつな円柱——。

「あお、あああ……！」

そのまま、五度目。身体中の穴という穴から消化液が入ってくる。喉を落ちて胃を抜けると、肛門から入った蜜とぶつかって腸を満たす。膣口を通して子宮を、尿道口を通して膀胱をいっぱいにする。なんの容赦もなく、身体の間という空間を、余さず媚薬漬けにする。

ぶつとぶ。意識が飛んで、叩き起こされて、またトぶ。獣のような呻き声で喘ぐ。消化がどうか、身体がどうかとか、そういうのを全て後回しにして、死んでしまいう。快感の波に溺れる、を地でいつてる。

走馬灯。水泳部をやったときに、溺れたことなんてない、って、後輩に先輩風を吹かせた、しょうもないことを思い出した。

意識が安定したのは、二桁以上果ててから。身体中が甘い。動けない。媚薬という名の消化液に、身体の外側も内側も犯され尽くして、精魂尽き果ててしまった。度重なる圧縮によって、私は歪んだ楕球に――円柱を縦方向に圧縮した姿に変えられていた。そして。

「う……………まって…………やめ…………」

私の懇願なんてお構いなしに、また、壁は収縮する。今度は、消化液はない。ただ、サラダチキンのようにぴっちり、私を隙間なく拘束して。そして、締めあげる。

ごぶ、と身体中至る所から媚薬が染み出していく。敏感になった身体の各部が擦れて甘イキする。全身性感帯に作り替えられてしまったのだ。内側も、外側も、残さず。

ぎゅむ、ぎゅむ、と音を立てて周りの壁が蠕動するたび、私の身体から水分が抜けていく。それと同時に、甘くて気だるい快感に襲われる。性的な快感だけではなく、おしっこや、うんちをする時に得られるような、排泄する気持ちよさ。止まらない。消化液を、体液を吐き出すのと同時に、力が抜け、身体中から私が漏れ出していくのがわかる……。

ゆっくりと、しかし確実に圧力は増してゆく。脳髓からじわじわと白い快感が滲み出ていく。私が持つ水分の、最後の一滴まで吸い取られ。乾き切った、ただの搾りカスになるまで。限界まで出し切って、さらに、もう一回り圧縮され。それから、拘束は緩む。絶頂の余韻は、まだ引かない。だが、ようやく終わった。カラカラに渴いた頭で、ただただ安堵する。

——そして、再び、大量の消化液が塗りたくられる。

「んぐッ!? なっ ん でえ!?!」

先程と同様に、『漬け』にされる。ただ、さっきまでよりも、深いところまで浸透していく感覚がある。

一度搾り取られて圧縮され尽くされたせいか、乾いた筆が墨汁を吸うがごとく、身体の間々まで媚薬が、消化液が

染み込んでいく。かつて経験したことが無い、全身に精を吐き出されるような、そんな快感。

そして、圧搾。隅々まで染み込んだ分、さっきよりも、深いところから体液が漏れ出ていくのが分かる。バカになる。本気でそう思った。

再び、潰け。圧搾。繰り返すことで、私の隅から隅まで栄養を搾り取っている。快感に殴られ続けて、もうメロメロの頭で理解した。



——太古の昔、植物と動物の中間、のような生物が存在した。その生物の根元の腹袋は、姫華昂を呑み込んで、バランスポールほどの大きさにまで膨らんでいた。しかし、今やその膨らみは元通りの二十センチ程度に戻っている。

ぎゅう、とそれは一際大きく収縮すると、膨らみは細長い茎を昇り始める。少し昇っては降り、またさらに昇っては降り、繰り返しながらゆっくりと進んでいく。それについて、茎の圧迫をうけて膨らみの中身……姫華昂の塊は、細長く成形されていくようだった。事実、茎の内側で、昂は幾度となく消化液を塗りたくられ、延ばされ、搾られ、その度に襲われる甘い絶頂に意識を揉まれていた。

——彼女自身、自分がこれからどうなるのか、臆げながら理解していた。

消化され尽くした搾りかす、大便に、いよいよ形作られていく、その実感がある。それなのに、なすすべなくただ震えることしかできない。

彼女が『出口』に到達したとき、その部分の茎は人間の腕の太さ程度の径で、他よりも僅かに膨れているばかりになっていた。

ぶぼ、という音が響く。それから窄まった穴が押し広げられて——肌色の、粘り気の強い物体が、姫華昂のなれの果てが、文字通り顔を見せた。

消化されて熱を持ち、湯気が立ち上るほどに茹だったそれは、ひどく敏感だ。先刻ぶりの外気の冷たさを受けて、全身が跳ねる。

「う……………あっ♡」

言ってしまうと、それは肌色のくそだった。その生物は消化液を塗り込んで溶かした後、養分を吸い取り、吐き出す、それだけだ。だから、この排泄物は、姫華昂を圧縮してきた、まさしく彼女そのものだ。ディテールこそ削ぎ落とされているものの、顔や乳輪、局部など、まだ人だった頃の痕跡は残されているのかえって無様だった。

香水の原液を思わせるキツイ甘い匂いは、彼女が消化液とブレンドされ、果てに果てたことを示唆する。その表面はぬらぬらと光って、ねっとり吸い付く質感をハイライト

が象っていた。

甘い消化液が表面を伝う。それは今の昂にとっては愛撫されたような感覚で、身悶えしてしまう。大きくびくりと震えたために、胸から上がちぎれ、ぼとりと落ちる。その衝撃で身体の内側に残っていた空気が抜け、あん、などと、口から甘ったる音が漏れた。まぶたの裏が白んで弾ける。彼女は気づかなかったが、そこは自分が先程脱ぎ捨てた、ショーツの上だった。

——うそだ。これは、多分、夢なんだ。

そんな言葉が昂の頭の中、ぼやけて、消えていく。こねくり回されて全身が性感帯と化した姫華昂は、惨めにも、くそとして排泄されることで絶頂してしまったのだった。びくびくと震える身体。トロトロに蕩けた表情。半開きで閉じない口の端から涎が伝っていく。パチパチ弾けて揺れる視界。こんな姿にされても、理性を保とうと、最後の理性を振り絞って、必死に目を開け、焦点を合わせる。

——上から、自分の身体の残りが降ってくる。

今、昂はまだ全体の三割程度しか排泄されていなかったのだ。ひねり出された残りの全身が、頭部の倍以上の質量を持つそれが、彼女に向けて落ちていく。

「あ……ふぎゅ！」

油粘土を叩き潰すように、あっけなく、残酷に。彼女は

自分の身体に押し潰されてしまったのだった。辛うじて繋いでいた理性の線はぶちぶちと引きちぎられて、溶かされて柔らかくなった脳みそに、快感の溶岩が流れ込んでいく。

「——ッ♡♡♡!!」

声にならない断末が、絶頂として全身を駆け巡る。既に昂の体勢感覚は失われ、今自身がどんな格好で、身体のパーツがどこにあるのかわからない。それでも、ぱくぱくと、秘部が口を開けたり閉じたりを繰り返すのは感じていた。

なけなしの水分が股間から噴き出て、甘い匂いが充満する。体液は、蜜にとって代わられていた。どろりとした液体が全身に降り注ぎ、染みていく。劇薬に全身が犯される。体が柔らかくなって、自重で潰れていく。絶え間なく果てる。人間だった頃には経験したことがない、キャパシティを完全にオーバーした快感。数度繰り返して、水分を吐き尽くして、それでもまだ足りず、痙攣は続く。

そして、とどめとばかりに、ぼたぼたと、涎を垂らすように花卉から雫が落ちてくる。止まる思考。感覚を置き去りにして意識を失うことさえできないまま、でたらめな快感に、ただただイくだけ。

震えるくその塊がとろけ、肌色のジャムになるまで、それほど時間はかからなかった。



◆ — 古生代から現代までの二億年。

初めの一年で、細かい理性で、どうやら自分は死なないのだと、シヨーツに染み込んでしまったために、地面のシミにすらなれないのだと気づく。深い絶望がある。

続く十年は、助けを待ち続ける。生きているのだから、望みはあるのだと。人間に戻りたいと。

次いで百年かけて、気がふれる。私はただのうんちだと、そう心中で呟くことで、ぐちゃぐちゃのペーストは辛うじて生き物らしきようなものを保っていた。

それから千年、精神が擦り切れるには十分な時間。この頃にはもはや何も考えることはできない。ただ、吹き抜ける風や、身体を叩く雨から微かな快感を得て、時折、ぶるぶると震える、機械のようなものとなっていた。

そして一万年。その動きも段々と小さくなる。もはや快感や絶頂を識別できなくなり、時折体が震えて全身に響くそれを、ただ「あ」とか「う」とか、そんな音に変えて、心中で呟くのみ。気がつくと、自分の上に土が堆積しており、暗闇の中に閉じ込められていた。染み込んでいたシヨーツは分解されたが、身体の形は保たれたまま、存在し続けていた。

残りの一億九千九百九十九万、八百八十九年。以下同じ。

◆ 地層から彼女が発掘されたのは、一年前。一億年ぶりの光に、掘り起こされる振動に、それは耐えられなかった。激しく絶頂して——ありていに言えば、バグって、そのまま固定された。

「……♡！ ！？ ♡！ ♡♡♡」

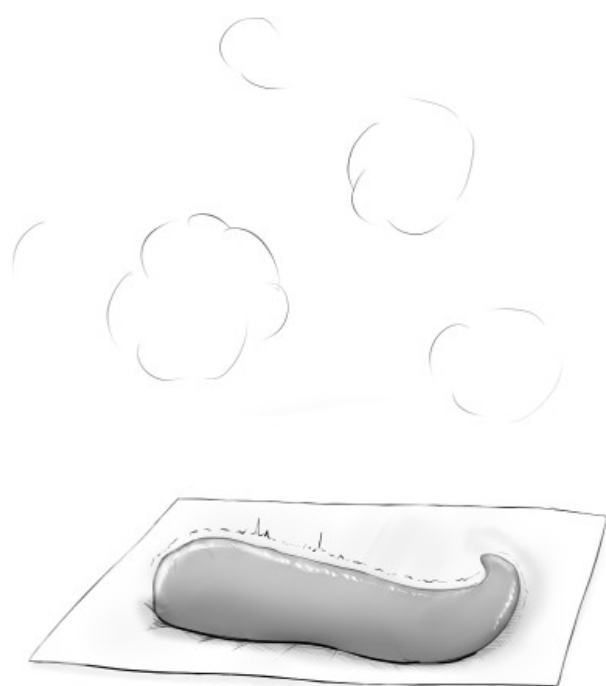
もちろん、発掘者が糞の化石の絶頂など知る由もない。ただ、自分が人間であることはおろか、糞であることすら忘れた哀れな化石は、ただただ、一億年以上待ち焦がれていた快感に、その魂を八つ裂きにされていた。

◆ 十二月の博物館、五才ほどの女兒が展示室を駆けている。「顔に見えない？ ……あ、わたしはあっち見にいく！」フンの宝石『コプライト』から少し離れたシヨーカー。一億年かけてぐしゃぐしゃに伸ばされ、固められた、薄く平べったいプレート。でき損ないのフンの化石。まるでアメーバのクッキー、という例えがキャプションに添えられている。女兒は立ち止まって指差し、けらけらと笑う。

「ゲリも化石になるんだね」

姫華昂のなれの果ては、今もそこで展示されている。

「……………♡」



排泄物化合同本



最近便秘気味だから  
ぽっこりお腹なのよねえ...

...いつもと  
変わってなく見えるけど?

ぽっこり



ほら  
自分の体なんだから  
何とかしてよ

待って待って!  
溶けてる溶けてる  
熱い!  
胃酸が強い!

そうなりたく  
なかったら  
頑張って耐えてね

このままだと  
混ざってうんちにな  
っちゃうよ



きゅ...

耐えても  
そっちに出す気が  
ああ...  
水分が絞られ



ギュッ

ギュッ

ギュッ

チッ





まあ—  
耐え切れないのは  
わかってたけど  
経験済みだから

あれれえ  
もう消化されちゃったの  
おうんちになっちゃった？



ふるる...  
お...きたきた  
私が混ざったおかげで  
柔らかくなって  
今回はイケそうな気がする

ん...

それにしても  
なかなかの大物ね  
トイレに流れるかな？

ふう...  
数ヶ月... いや数年ぶりだったかな  
心なしか体も軽く感じる

ホカ

ホカ



ダンジョン 19 F

うーん

コッ

コッ

失敗したなあ…

あっ

何だろう  
嫌な予感がする…

みんな無事だと  
いいんだけど…

カッ

しまっ

わぷっ!?

毒ガス…っ!?

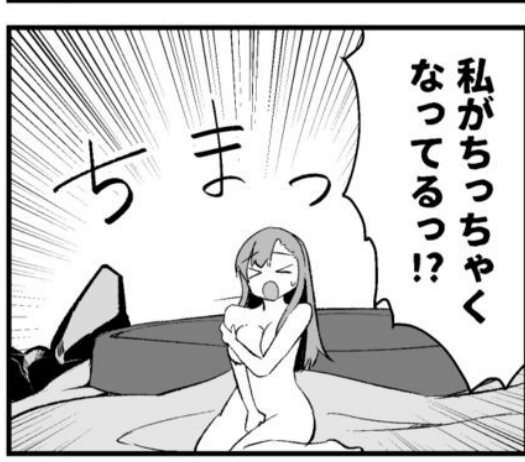
まずい…

身体が…痺れて…

だめ…っ

ボヤ…

意識…が…







息が…  
苦しい…

うはああつ♡

魔力が…吸われて…っ

なんで…  
こんな…っ

身体が…  
あついい…っ!?

熱いのにい…っ

このまま消化されて  
終わりなんて…

そんなの…  
嫌あ…っ

誰か…助けて…っ

こんなに…♡

気持ちいいのおっ♡♡♡♡



ああ…  
あったかい…  
ググググ

腕も脚も…  
頭も蕩ける…♡

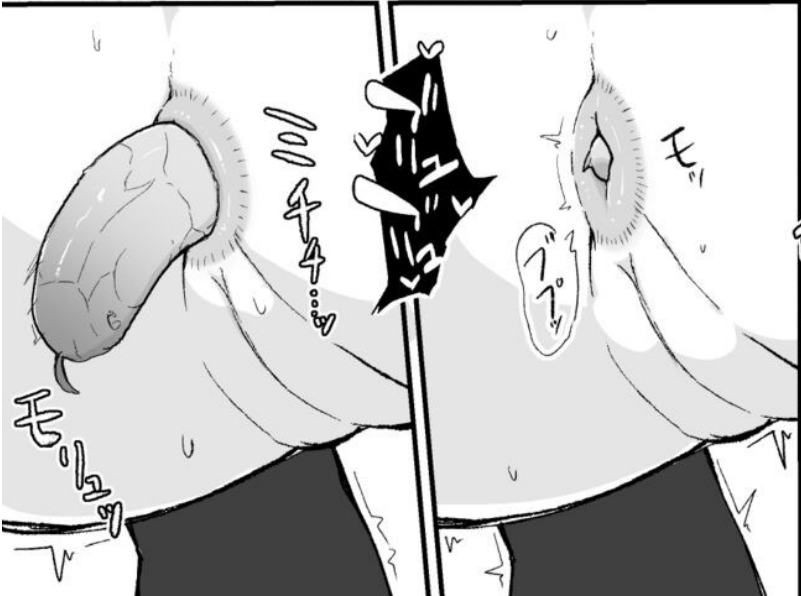
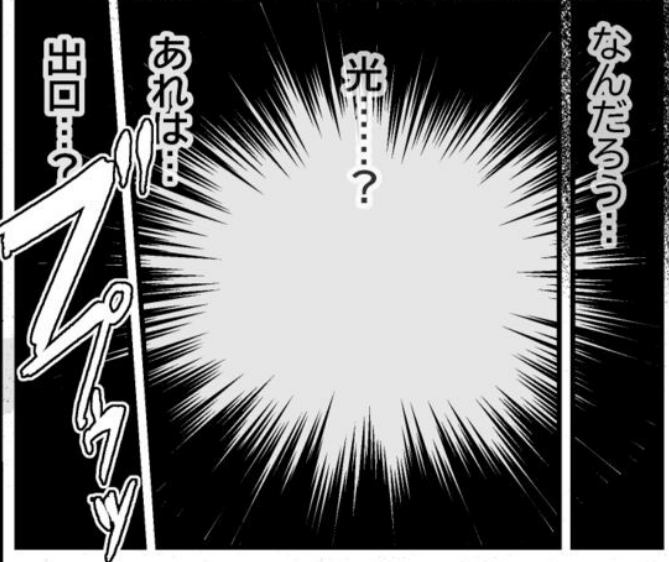
身体も  
グチュグチュに  
捏ねられてる  
ニチャ…

グルグル…  
バナナみたいな形に  
成型されて  
また捏ねられて…

魔力も水分も  
私が何もかも全部…  
吸われて…  
ドクン…



私も  
あの残りカスに…



ふう…っ♡  
ブッ

はあ…  
あーすつきりしたあ♡

結構上等そうなマント  
使ってたんだね♡

名前とか聞かなかったけど  
どっかの有名な騎士とか  
だったりのかなあ？

おしり拭くから  
アナタの  
マントもらっちゃうね♡

ま…  
食べ物の名前なんて  
なんだっていいケド♡

すっごく  
美味しかったよ♡

ふう…♡  
アナタの魔力♡

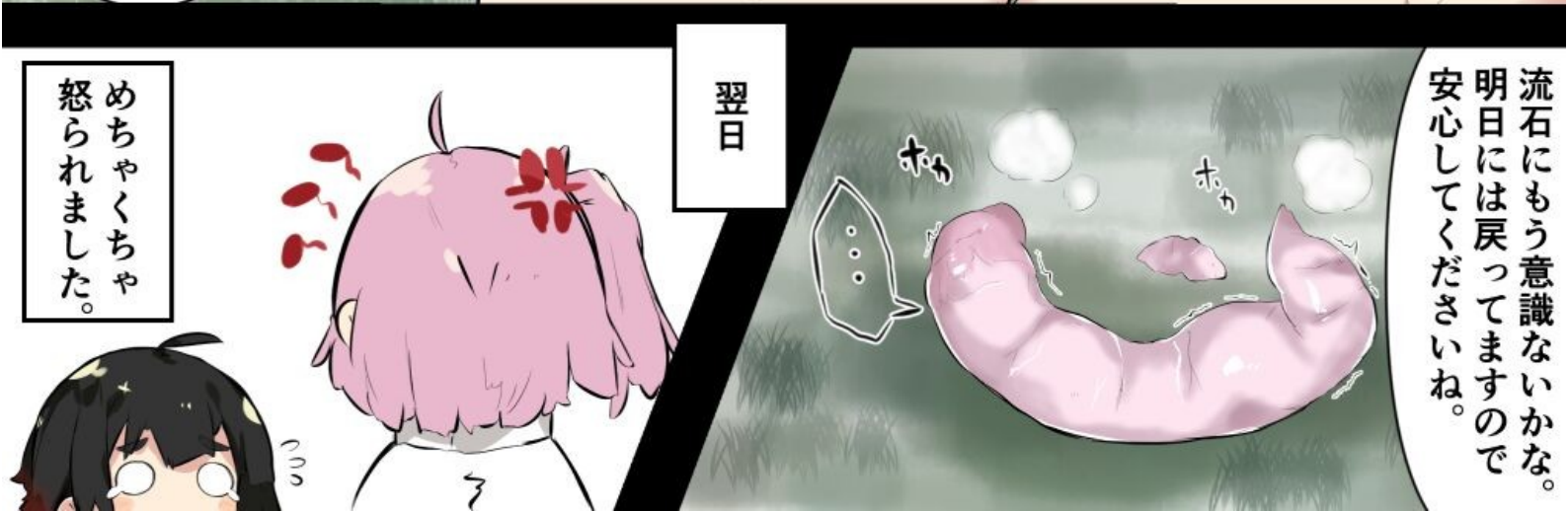
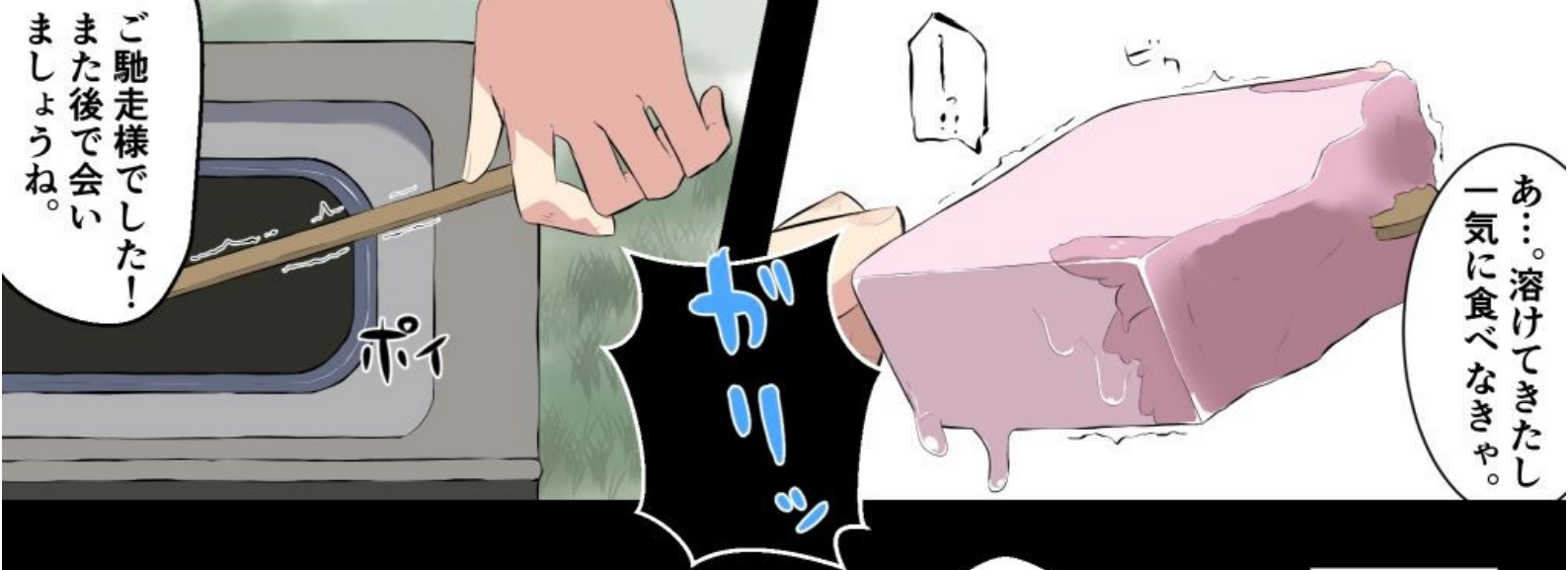
END













## アイドル捕食時代

### ほうじ茶プリン

演者として私が通された楽屋はビルの隙間に押し込まれたかのような狭さだった。足の細い椅子に大きな鏡、そしてそこに映る私は今日も可愛い。ぱっちりとした目や無駄のない肢体、そしてファンが求める「アイドル好きのアイドル」らしさ。雰囲気のような部分までしっかりと仕上がっており、不安はない。

一方でマネージャーは本番直前ということもあり一騎当千の武将のように動き回っていた。複数の携帯を取っては置き、私を励まし、着ている衣装を確認し、スタッフに指示し、これができるキャリアアウーマンかと感心してしまう。彼女自身もアイドル好き、というよりはや信仰めいたものを感じるほどに好んでおり、だからこそ私は信頼しているのだ。今日のライブだって彼女の奔走なしには実現しえなかっただろう。

「緊張してないかしら？昨日は寝れた？喉は痛くない？」  
「大丈夫ですよ、ちゃんと寝れましたし元気です。」

嘘だ。ひどい空腹に苦しめられていたが、笑顔で返してみせる。かれこれ半年食事を摂っていない私の肉体は、そろそろ危ないぞと警告を発している。かえって飢えて研ぎ澄まされているような感覚もある。

「さ、頑張ってね！」

肩をがっしりと掴まれ、鼓舞とともに楽屋からステージへと送り出された。少し髪は乱れ、化粧には目の下のクマを隠すための苦勞が見える。マネージャーの努力が偲ばれ、一層気合が入る。負けたら人生の終わりなのだし、もとより頑張らない気など無いが。

「ありがとうございます、頑張りますね。」  
頼りない椅子を押し込み、努めて笑顔で応えてみせる。鏡の前で確認した、綺麗な笑顔のはずだ。

アイドル。昔は職業だったらしいそれは、今では突発的な病を指す。アイドルに雇ったものは食事を摂らず、汗もかかない。常人離れた美形にもなる。それだけなら良かったのに、アイドルは喰い合うのだ。物理的に。

最初はどこかの高校だったか、アイドルに雇った二人が言い争いになり、言い負かされた女生徒はみるみるうちに焼き菓子に変化し、それをもう片方が捕食してしまった。周りはそれを囃し立て、盛り上がり、成績は急上昇し、ストレスは消えた。アイドル同士の生存競争は丁度いい娯楽であったのだ。

私もアイドルとなり、マネージャーが付き、歌とダンスの練習を行い、初めての捕食を行い、煌びやかな日常を謳

歌してきた。実際ちやほやされるのは嫌いではないし、元々アイドル好きだったことも幸いして“勝てる”アイドルとなった。アイドル弱肉強食時代、ただ歌って踊れるだけではないけない。対戦相手について知り尽くすのだ。アイドルは元々どんな人間だったか、何が好きで何が苦手かはもちろん、法律が許す限り調べ尽くす。元々の趣味もあるが、その方が美味しい。肉体と経歴まで捕食し、私の中で物言わぬ搾りかすにする。その行為に本能的に惹かれてしまう。アイドルとなってしまおうとアイドル同士での捕食でしか食欲を満たせなくなってしまうが、同時に別の欲求も満たしているのだろう。

そして今日もライトに照らされ、ステージに立つ。広くないステージには生配信用の機材も入り、人数は千人いかないくらいだろう。ライブの結果は私の思惑通りだった。

「みなさん、ありがとうございます！」

上手から下手に満遍なく、ステージ上からファンへと呼びかける。勝った。勝った。打ち負かしてやった。ライブでの盛り上がりという点数化されない勝負だからこそ、この場に満ちた雰囲気全てを物語っている。アイドルらしい笑顔を見せる私とは対照的に、対戦相手の彼女はステージ上で放心している。先ほどの凛とした立ち姿は萎びて

いる。相手は今日まで過密スケジュールだったはずだ。プライベートの時間は確保できておらず、最近レッスンが上手くいっていないことも確認済みだ。震えながら「話が違う」、「おかしい」と呟く姿はファンには見せられまい。アイドルなら最後まで笑顔でいるべきだろうに。

「それではここからはお楽しみの時間で〜す♪」

私が視線を送ると、彼女は小さな声をあげて縮こまる。私は今どんな顔をしているのだろうか。一步一步噛み締めるように、観客に見せつけるように歩む。歩くたびに対等な対戦相手の関係から捕食者、被捕食者の関係に変わっていくのがわかる。生物的な負けを感じとったアイドルは肉体が変質する。相手に食べられて吐き出されるためのカタチになるのだ。

「いや、まだ負けてない、アタシはまだ負けてない！」

後ずさり、私を見つめたまま声を張り上げる。肉体はすでに変わり始めているのだろう、四肢には力が入らないようだ。そんな彼女の耳元に顔を寄せ、

「私の中でゆっくり消えていってくださいね…?」

そつと声をかける。敗北を刻みつける。彼女の体はそれを一番分かっているらしく、指先からしゅうしゅうと音を立てて変わっていく。

「あ、やけ、焼ける、焼きあがる、止まって、まだだか

ら、」

会場にバターと砂糖の匂いが満ちていく。もちろん会場内でお菓子作りをしている酔狂なファンがいるわけではない。半狂乱になった彼女の指先は肌色であることを止め、艶のある淡い黄色に変化していく。生地へと変化した部分は自分の意思では動かせないらしく、重りのついた枷のように動きを制限する。

「とっても美味しそうですね！お腹空いたし楽しみだなあ

♪

ファンサービスも忘れてはいけない。目の前の巨大な生地が焼きあがるまで、ファンを退屈させてはならない。私が次のライブの告知を挟む間にも彼女は順調に焼けていく。

「えっと、このあと一時間後にライブ後配信しまーす！」

「くっ、ふぁ、あぁっ！」

柔らかそうな指先が焼ける。

「あ、グッズ販売もあるのでぜひー！」

「助けて、やだ、みんな、アタシ、まだ、うたいたい、許して、」

右足以外が焼き菓子となっているのに器用に観客席へと逃れようとする。逃がさない。もう空腹も限界に近いのだ。

「最後にツーショットかなあ？」

「あ。」

彼女に覆いかぶさるように後ろから抱きつき、動きを押さえつける。そして笑顔でカメラにハートを作る。素っ頓狂な断末魔と焼けた鉄球を水槽に入れたような音。対戦相手のアイドルは人型のクッキーとなった。

ステージには助けを求めて手を伸ばして焼き上がったクッキーと私。直前まで伸びやかな声で歌っていた喉は最後の断末魔の形で綺麗に焼き上がっている。アイドルとして愛されるためのビジュアルがそのまま焼き菓子の彫像となった姿を至近距離で眺めることができるのは勝者で捕食者の自分だけの特権である。

伸びた指先や長い睫毛は触れるだけで壊れてしまいそうな脆さと先ほどまで踊っていた躍動感をそのまま押し込んだような美しさも同居している。折れてしまわぬように指先にそっと触れると、肌とは似ても似つかない質感に興奮が高まる。

「いただきます……♪」

自然と口角が上がってしまう。私はクッキーとなった彼女の指に手を絡ませるように繋ぎ、そのままへし折る。ため息にも似た笑い声が漏れてしまう。支配した、勝った。本能的な支配の喜びが広がる。焼き上がったばかりの断面からは熱とともにバターの匂いが漂う。人間を、アイドルを

辞めた彼女の温度が指先を通して伝わる。理性的だったのはそこまでだった。砕き、噛みつき、犬歯を剥き出しにしながら食らう。可愛らしさとは対極にいるような振る舞いだが、何故かファンはこれを求めている。今だって固唾を飲んで観ている。アイドルでもなく人間でもなく、食欲を満たす人型の化け物とでも言わんばかりの勢いで食らう。人型のクッキーであったものがクッキーの塊になり、その塊も抱えられるほどになり、その全てが私の胃袋の中に収まる。

「はい、今日はありがとうございました♪」

ファンを会場から送り出す。アイドルはいつ喰われるか分からないのだ、だからこそ盛り上がるのだろう。

「あー……美味しかったあ……」

全ての観客を送り出し、静かなステージの中央で座る。膨らんだお腹には彼女が詰まっている。私の体内では彼女の彼女たる部分を養分として吸収しているのだ。腹部がじんわりと温まり、その温度が全身に満ちていく。彼女の経験や努力、魅力、才能といったものを丸ごと頂いてしまうのだ。初めて体験した時は何度か絶頂してしまったが、今回はそこまでの昂りはない。それだけ私の方が格上だったのだろう。膨らんだお腹もほとんど元通りになってしまっ

た。

体の中で必要なものを吸い切った私の肉体は、彼女であったものを排出しようとしている。体内で不要になった“それ”が出口を求めている感覚。外はファンがいるかもしれない。それに人間であった時ならば不潔だが、アイドルはトイレになど行かない。衣装をずらし、彼女であったものを私の中から解放しようとする。

「見てますよね？」

誰もいない空間のはずだが、どことなく居心地の悪さを感じて声を出してみる。

「なんで気付いたの？アイドルは超能力も持っていたりとかするのかしら？」

「いや、そういうわけではないですけど……」

舞台袖の暗闇からマネージャーが現れる。この後は見てほしくないと言った再三言っているが、彼女がその願いを聞き届けなかった試しはなかった。優秀で完璧なマネージャーだが、その原動力がアイドルの排泄シーンを観るためだと告白された時は正直引いてしまった。

「さ、どうぞ！」

満面の笑みで携帯を構えている。「あの、撮影は」と言いかけたところで「個人用だから、アップしないから！」と力説されてしまった。ライブ明けて満身創痍の状態の彼女



の熱意に気圧され、私の希望は通らない。それにもう敗者の搾り滓を体内に留め置くことはできないと肉体が訴えかけてくる。

「く、ふう……♡」

「ほら！早く！早く！」

恥辱的です、その掛け声やめてほしいんですけど、とその声が出る前にべちゃりと足元で音が聞こえる。

「はぁ、すごい可愛い……！」

マネージャーのカメラが向けられる方向は私ではなく私の足元。透明な体液でコーティングされ、デフォルメされた人型のような形のクッキー生地がそこにはあった。私と戦ったアイドルの成れの果て。私と彼女であったものは小人と巨人のようなサイズ差がある。捕食時にも支配的な興奮があるが、排泄したアイドルの姿を見ているこの瞬間も加虐的な欲求が満たされる。マネージャーを奇人だとは言えないだろう。焼き上げられたクッキーとなった彼女からあらゆるものを奪った残り滓を排泄したのだ。

排泄物となった彼女は先ほどまでの精緻で綿密なクッキーの状態からはほど遠く、棒人間のような状態で打ち上げられた魚のようにびくびくと震えている。腕のような部分や脚のような部分を動かして立ち上がろうとするが、クッキー生地では立ち上がるなどできない。

「ほら、立ちあがろうとしてるわ！絶対無理なのに！可愛いわよねえ……♡」

携帯のカメラで連写しながら声を上げるマネージャー。

「あの、そんなに楽しいですか？これ……？」

私の興奮のピークは排泄した瞬間に終わっている。体温とともに彼女を排泄したせいか、妙に冷静になっている。

「最高よ！あの美しいアイドルがこんなに可愛くなっちゃって……ほらほら！全身くっついてきちゃったわよ！」

クッキー生地の状態でもがく元アイドルは一本の棒状になっていた。もがくうちに四肢がくっつき、その状態でも必死にもがいているようだ。抱き枕のような形となって時折痙攣する姿は美しくも可愛いとも思わない。痙攣の間隔も少しずつ長くなり、やがて停止する。それを確認したマネージャーはニタニタと笑みを浮かべながら太い試験管のような容器を取り出す。

「うえ……それ、私が出したやつですよ？」

「だってアイドルよ？素敵じゃない？それにあなたの勝利の証みたいなものだし。」

傷つけないように排泄したアイドルを慎重に容器に入れたマネージャーはそれを金属製のケースに入れ、よし、と呟く。

「まあそういう約束ですし、文句は言わないですけど……」

「それよりもほら、体はどう？いい感じ？」

軽く踊り、歌声を出してみる。体は軽く、声は肺のサイズが大きくなったかのように通る。レッスン何十時間分が圧縮されてこの数十分で身についたのだ、当然気分は良い。

「そうですね、今すぐ練習したいくらいですよ。」

英気に満ちた私の顔を満足そうに見つめ、マネージャーはすぐにレッスンを準備してくれる。ここだけ見れば優秀で完璧なマネージャーなのだが。

あれから数ヶ月、私とマネージャーは神妙な面持ちで楽屋にいた。破竹の勢いで勝ち続けた私はみるうちにアイドルとして大成していった。それは裏を返せば格下のアイドルでは成長できないということでもある。それをマネージャーに告げると、すぐにマッチアップを行なってくれた。

「大丈夫、今のあなたならいけるわ！」

真っ直ぐに見つめるマネージャーだが、確実に勝てるとは言いついてくれない。それもそうだ、向こうはキャリアも格も私より上だ。ステージだって今までで最大の規模だ。配信だって現状の時点で私史上最大の入り。これで緊張しないわけがないだろう。だが、

「はい。勝ってみせます。」

強く言い切ってみせる。今まで通りマネージャーと協力し

て対策は十分に行なってきた。あとは本番でどれだけのパフォーマンスを見せられるか、ファンを楽しませることができるかにかかっている。深呼吸、集中、そして頭の中で段取りを確認。よし。

「いつてらっしゃい！」

マネージャーの声色は普段通り。ステージへと向かう。

ステージに立ち、自己紹介を行う。ファンの期待を裏切らない、いつも通りの印象を残しつつ盛り上げるように。流れるように口に出すが、声が震えないように必死に堪えた。その甲斐もあって、私のファンからは熱量が伝わってくる。普段であればこの時点で八割方勝利を確信してしまうような、良い予感と万全の準備を全身で噛み締めることができた。

「はい、こんにちわー」

後ろから刺されるような気分だった。反射的に振り返ってしまふ、見惚れてしまふ。やる気がなさそうで、だるそうで、自然体で、だがその身体から喰らってきたアイドルの多さを感じてしまふ。同種だからこそその恐れ、体格の大きな相手から逃れようとする本能のようなものだろうか。

「あっ」

そこからはあっという間だった。

「えっと」

MCはただどしく、言葉は続かない。

「その」

ファンを見ているのか、対戦相手となるアイドルを見ているのかわからない。どこに立っているのか、何を歌っているのか。徐々に身体のうちが泡立つような感覚が湧き出す。風邪をひき始めたような、自分の無意識下で変わっていく感覚。そしてその感覚は彼女を視界に入れるたびに強くなっていく。長い髪が動きに合わせてなびき、気だるさが染みついたような垂れた目尻が時折肉食獣のように鋭くなり、当たり前のように観客のボルテージを上げていく。ステージ上にいるにも関わらず外から覗くだけかのような疎外感。前に出ないといけない、でも前に出てどうするのか。なんとかステージに立っているだけの私に何ができるのか。

「はいはい、ありがとー」

気の抜けた彼女の締め。そうか、終わったのか。気付けば立っていることすらできず、へたり込んでしまっていた。敗北が実感となっていく。嫌、嫌、許して、見逃して。声が出ない、私はどんな顔をしているのか。ほんのりと汗をかき、私を見つめる彼女の足元に縋り付く。彼女は笑みを浮かべているが、それは優しさではない。それを私は一番

よく分かっている。

「ほら、もう手放しちゃいなよ。」

しゃがみ込んで私の目線でそっと声をかけられる。柔らかそうな唇から紡がれた言葉が体に染み込む。まだまだ終わリたくないと呼ぶ私の理性、撤収作業を始めるように肉体を変質させていく本能。呼吸が激しくなり、吐息は比喻でもなく甘くなっていく。乳製品の馴染みのある匂いが漂ってくる。

「怖い？怖いよね？大丈夫ー!？」

安心してねと言わんばかりに抱きついてくる彼女。触れた部分から大切な何かが奪われていくような、でも憧れの人に抱きしめられていて緊張してしまうような、そしてわざとらしいセリフに腹が立つような。感情がかき混ぜられているうちに肉体もかき混ぜられてしまったらしい、彼女が離れると私の前面はカスタード色のプリンに変わっていた。変化した部位が染み込むように内部へとさらなる変化を誘発させる。

「あつ、うえ、かぶ」

喉が変わり、悲鳴も出ない。声を出そうと必死に空気を吸って、吐く。音の代わりに口の端から茶色いカラメルが漏れ出るだけだった。全身が弛緩し、べちゃりと倒れ込む。突っ伏して寝ているかのような姿勢で倒れ込む私。捕食さ

れる側の感覚が苦しければもつと抵抗しただろう。筋肉が甘いプリンになっていく感覚が苦痛であれば最後の一瞬まで堪え、耐えただろう。

「はいはい、さっさと変わってね」

背中に手をつ込まれる。変わりかけの肉体に刺激を与え、変化を進めるのは私だつてやってきた。目の前の彼女も、それが屈辱と苦痛を与えるものだと思ってやっているのだろう。だが実際は違う。

変わっていくのは快感を伴い、快感が私を変えていくのだ。本来性感帯ではなかった部位が思い出したかのように敏感になり、弾けるようにその部位が達する。体の指揮系統が奪われて陥落していく。

「頑張って変わってね」

「んぶお!？」

ぐちゅり、と私の腹部に腕が突っ込まれる。彼女の内側から彼女の体温が伝わってくる。文字通り人肌の温度なのだが、私には熱された鉄の塊が体内に入ってきたかのような衝撃と、性感帯を構成する神経を直接触れられたかのような快感が同時に襲ってくる。もはや汗や涙も黒いカラメルへと変化しており、くぐもった声とともに吐き出された

カラメルがステージ上に飛び散る。

半固形の肉体はついに自立できなくなってしまう。引き締まった肉体はプリンとなったことで重く太く丸みを帯びる。骨もなくなり、巨大な人型のプリンとなった私は自分で撒き散らしたカラメル溜まりでぐねぐねとがくしかなかった。必死の形相のままプリンになり、打ち上げられた魚のように動き、助けを求める。体がプリンとなつてなお許して欲しい、見逃して欲しいと思ってしまうのはなぜだろうか。

「食べちゃうから黙って♡」

私を打ち負かした彼女が笑顔で言い放った。

自我を手放せと言われて、「はいわかりました」と自意識を手放すことなどできないはずだったが、その瞬間私は人型としてではなく生菓子としての自我が自己を上書きし、勝者の命令と声にそつて人間であることをやめて食べられる存在として生まれ直した。私の肉体に精神が引っ張られたようでもあり、私が今まで内側に喰らって留めていたアイドルたちが従ったようにも感じられた。

「ふう、美味しかった♡」

カラメルでベタベタになった衣装だけが残され、プリンとなつた彼女は勝者に喰らい尽くされてしまった。体内で



はその肉体に染み込んだアイドルとしての能力や経験といったものが吸い出されていった。乾いた大地に水が染み込んでいくかのように、アイドルを喰らったアイドルは美しくなる。すでに能力のある彼女がさらに磨かれ、オーラや雰囲気、カリスマといった形のないものまでもが高まっていった。

「それにしても趣味悪いよね」

プリンを喰らって満足げな彼女が宙に言葉を投げかける。

「あらあら、なんで気付くのかしら。」

舞台袖から現れたのはプリンとなった彼女のマネージャーであった。

「担当していたアイドルが負けたのに随分と余裕そうだけど？」

「そんなことないわ、とっても残念よ。」

彼女のパフォーマンスが見れなくなるなんて、と続ける。

残念そうな表情が崩れ、にたりと笑みを浮かべる。

「そろそろ搾りかすになった姿も見てみたくなっちゃったのよね。」

彼女の視線の先には、棒状でぶるぶると震える卵色の塊があった。

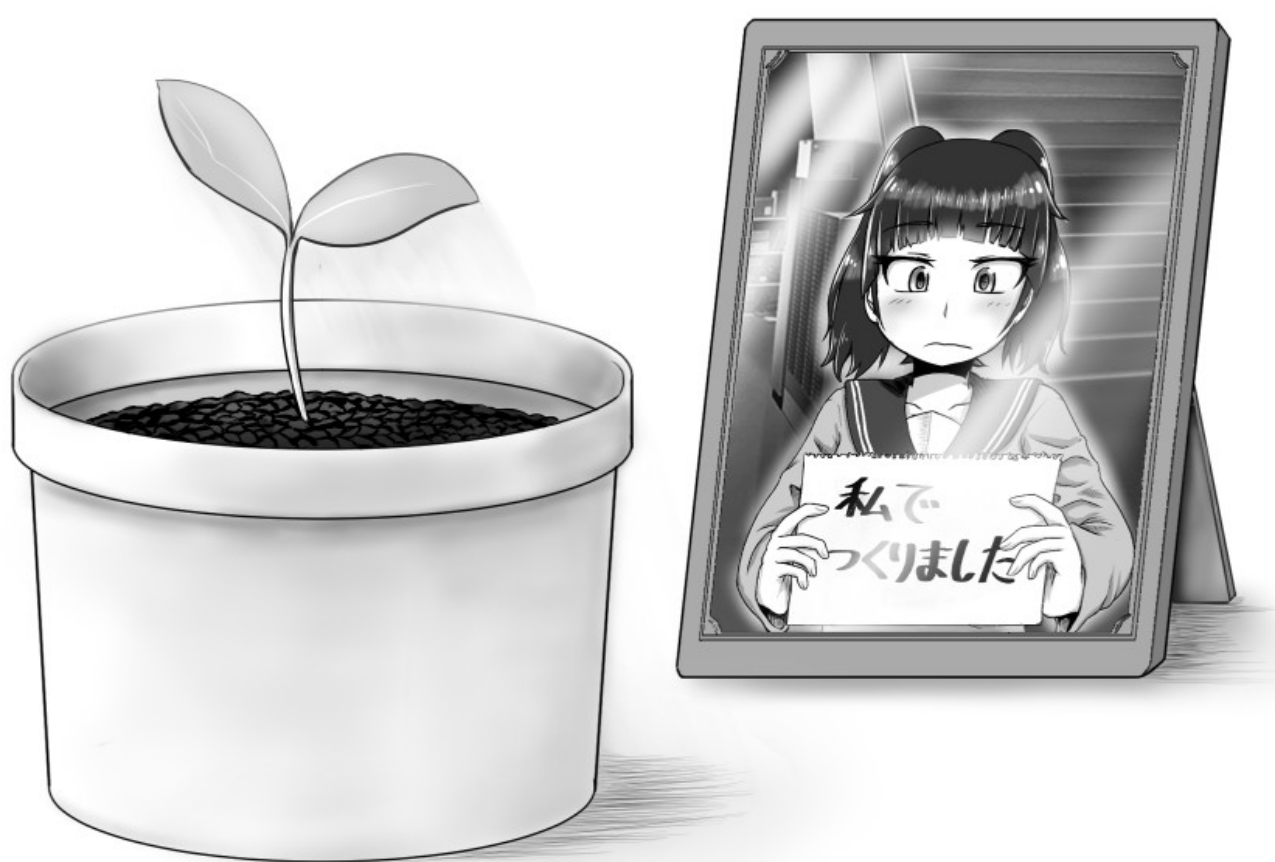
（あれ、わたし、なにも、みえない、）

アイドルの中で魅力や経験を吸い尽くされた出洩らし。記

憶や元の人格といったものは不要であり、同時に排泄物となったそれに内包される。とはいっても、思考することも徐々にできなくなり、ぶるぶると震える愛玩動物に成り果てるのだろうが。マネージャーが容器にアイドルであったものを入れ、蓋を閉める。

「この姿が一番可愛いわよお♡」

恍惚とした表情で容器に入った自分の元担当アイドルを見つめるマネージャー。その視界には、次の獲物のアイドルが映っていた。



排泄物化合同本

王国の第四王女が  
辺境の小国  
クラールヴルムへと  
拉致された

近年急速に  
勢力を広げた  
この国は  
禁領とされる

ソフィア様ーッ！

その力の源は  
淫魔たちの使う  
謎の魔石

そのそれぞれが  
数百の兵に  
匹敵するほどの  
力を秘めている

王位の政争に  
翻弄される末姫に  
王家からの  
支援は望めず

近衛騎士の少女は  
先々で助力を受けつつ  
ついに淫魔の城へと  
辿り着いた

禁領魔  
クラールヴルム

安堂 捺









昨日はいっぱい  
食べたから  
たくさん出ちやったのね

くふっ……  
ソレ？

でもソレ  
ウチの国には  
とっても  
大事な資源なの

全然ばっちくないし  
むしろいい匂いでしょ？

ああ……  
早く見たいなあ

このお姫様が

スライムに  
食べられて

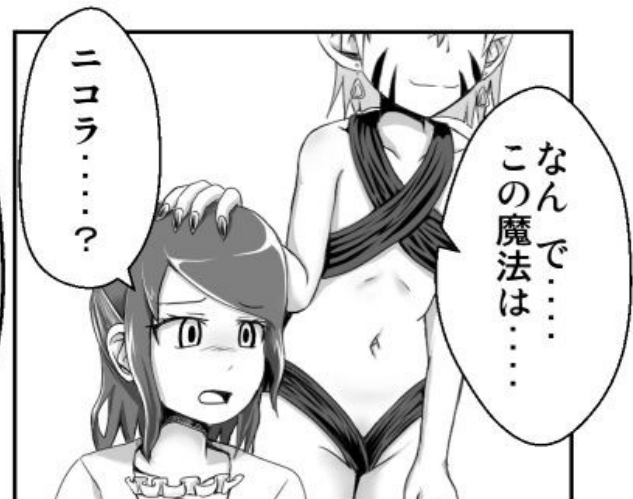
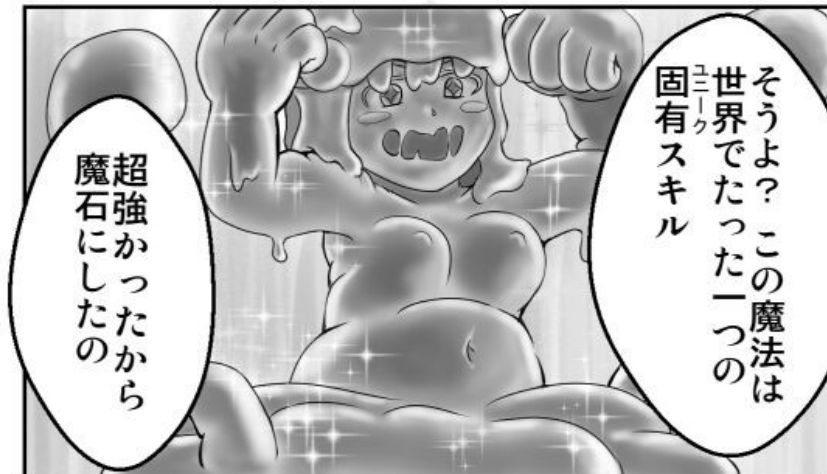
ウンチに  
なるところ♡

黙れ

まどろっこしいのは  
やめたぞ

塵ひとつ  
残さん









うんち  
魔石にされて  
幸せそうでしょ♡

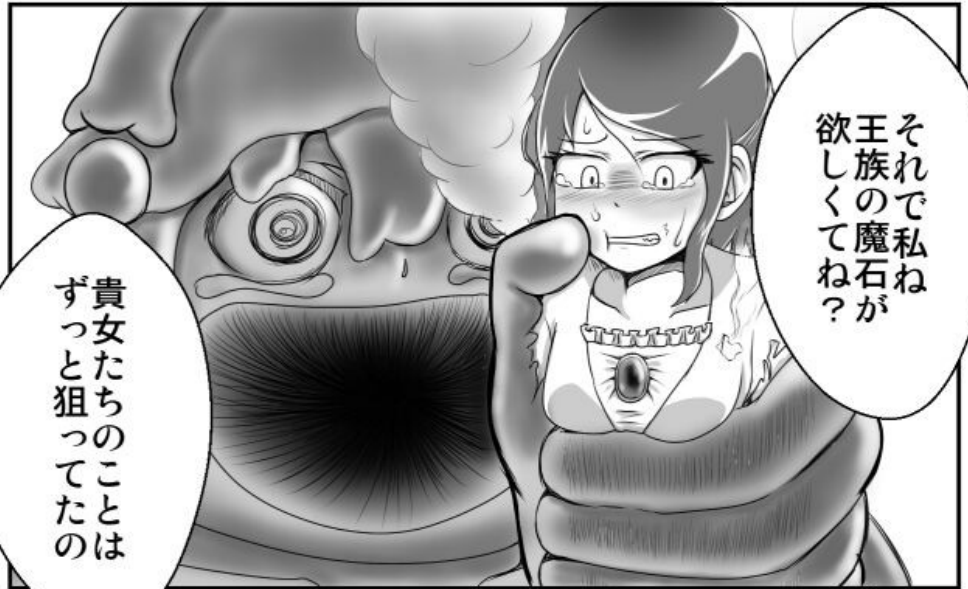
霧の里の  
“預言少女”  
ユーリカちゃんも



シエラ海の  
“燃える海賊船”  
ヴィラちゃんも……



ツさせるか!!



それで私ね  
王族の魔石が  
欲しくてね？

貴女たちのことは  
ずっと狙ってたの

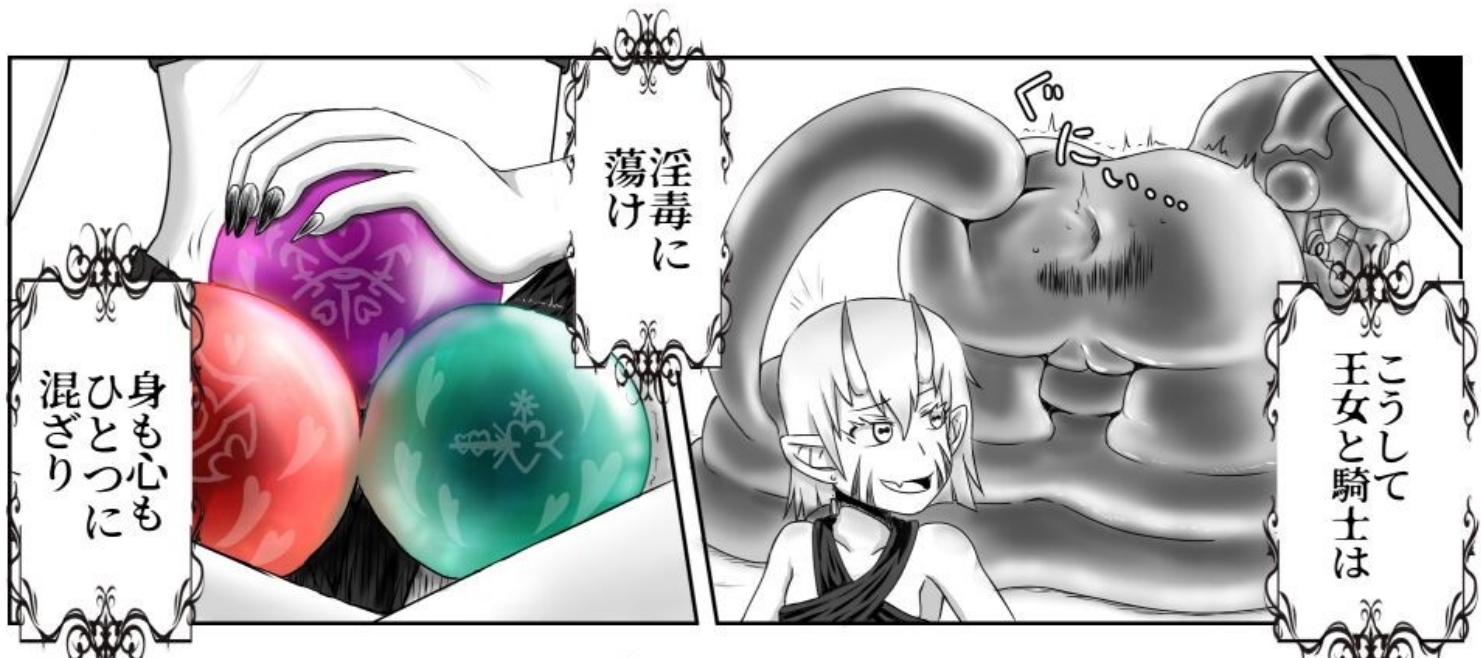


クリアフォーサイト  
未来開明

レッドインパクト  
爆血鉄拳







END...





Tardigrada・Girl spin-off



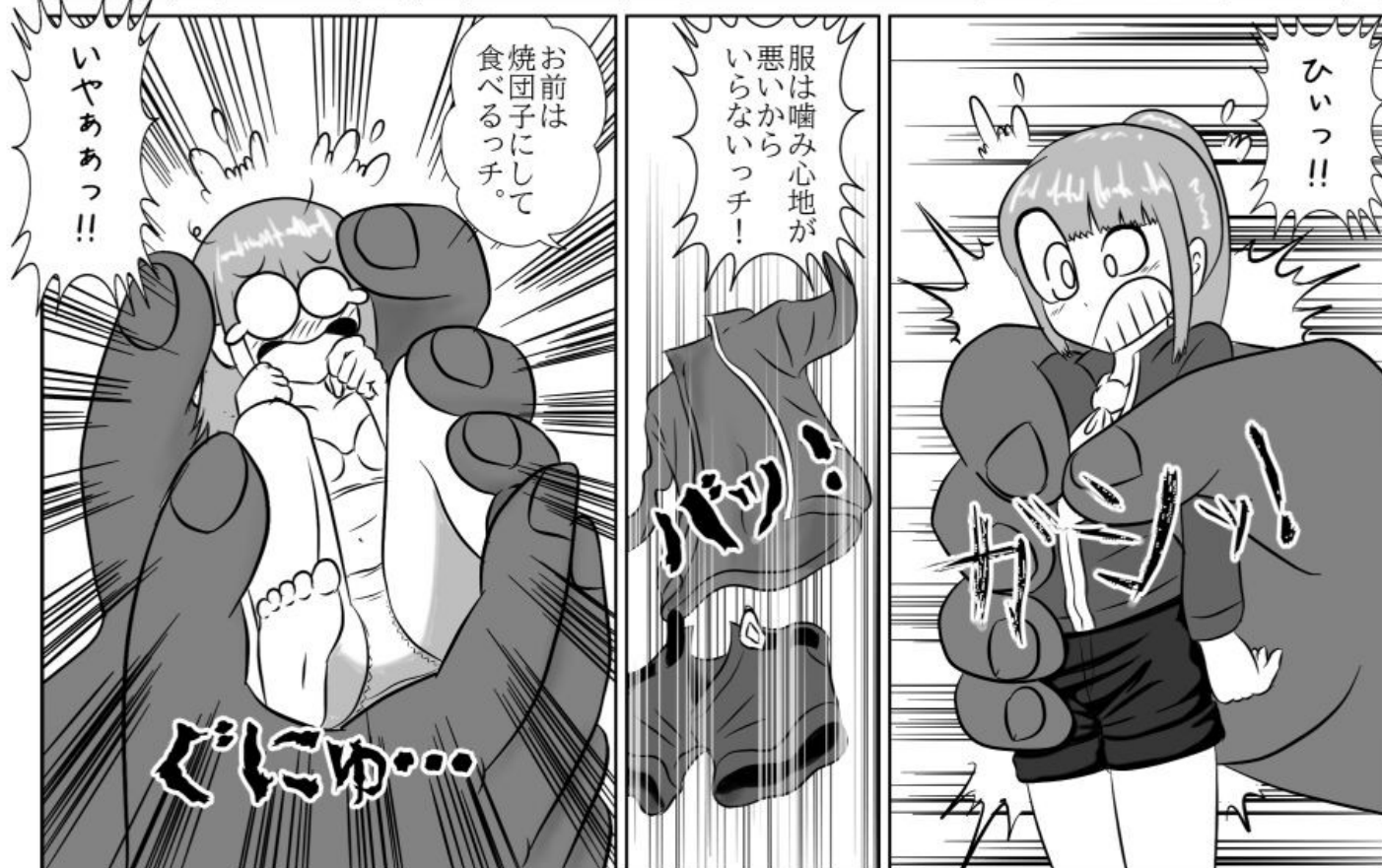
るりょうりに健山



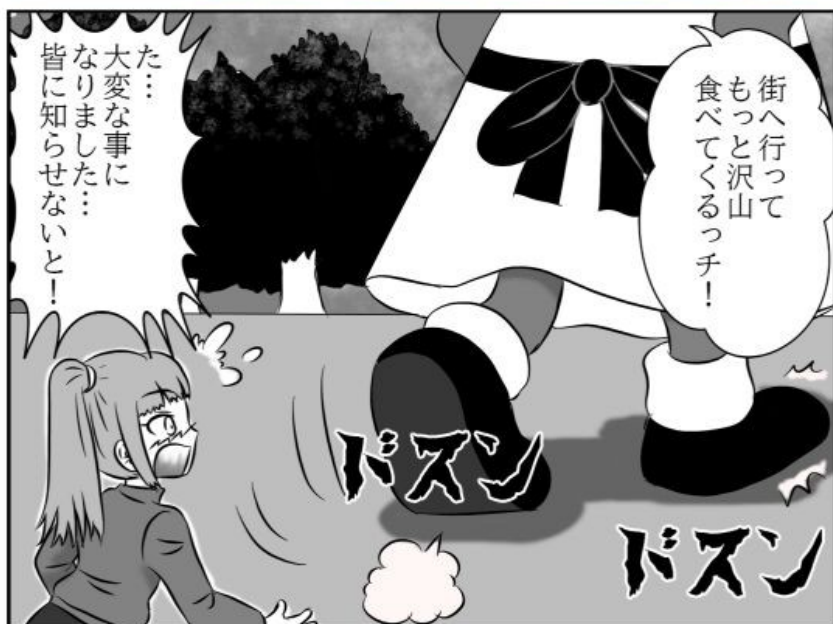




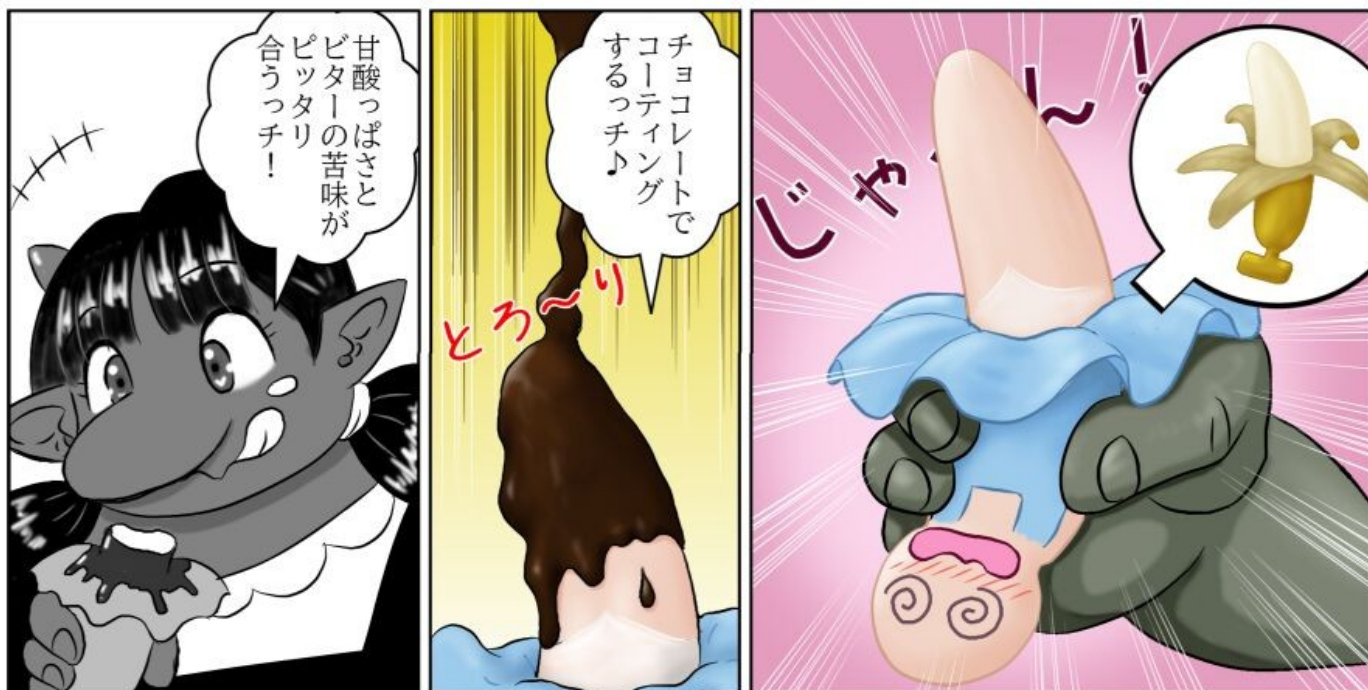
通り名が父親の蠅の王に  
ちなんで、蛆姫ですからね。







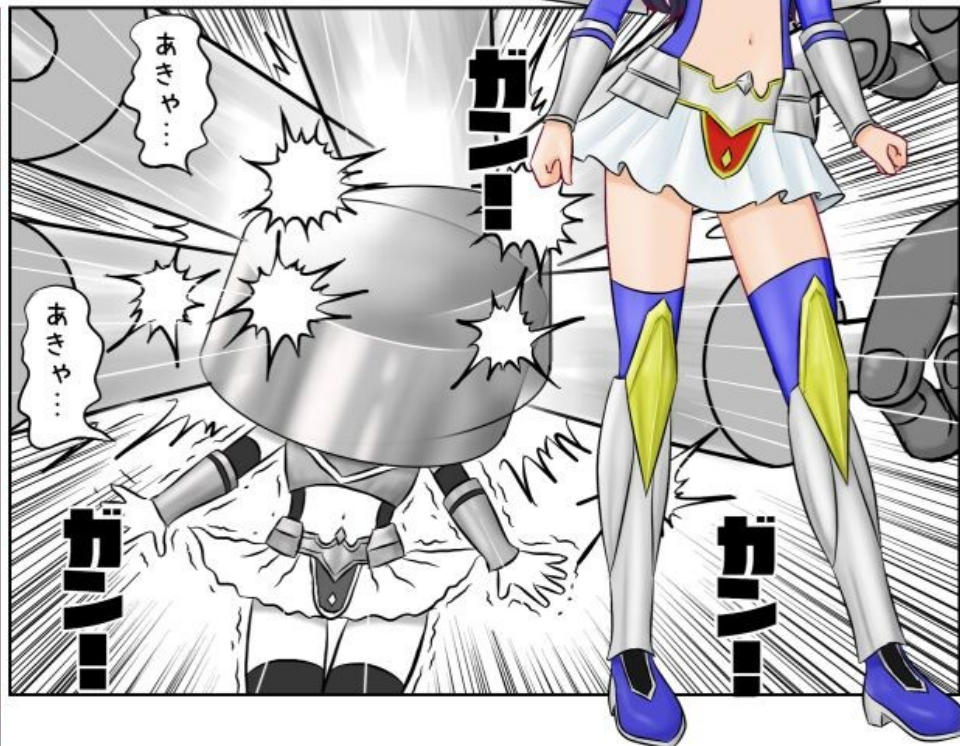




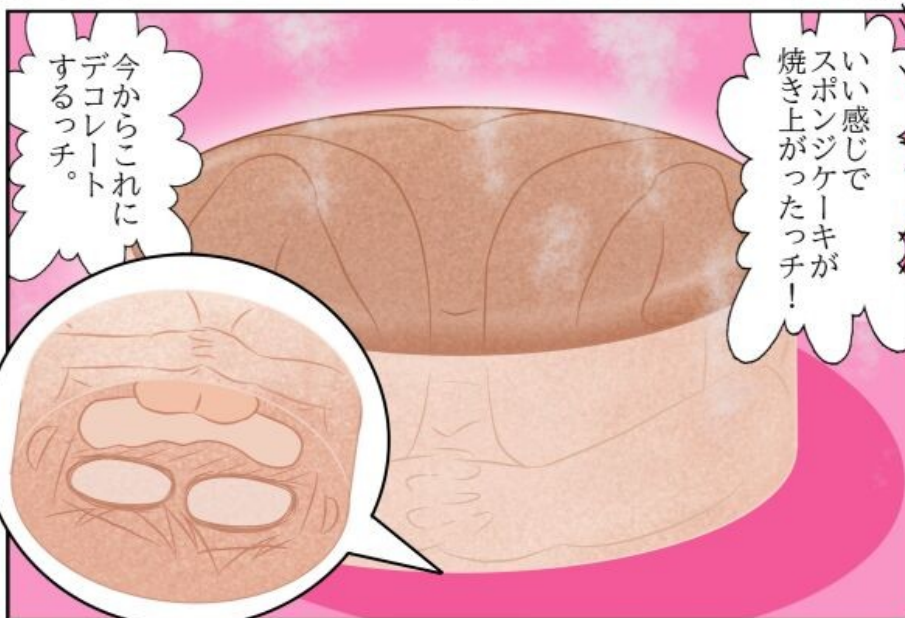
















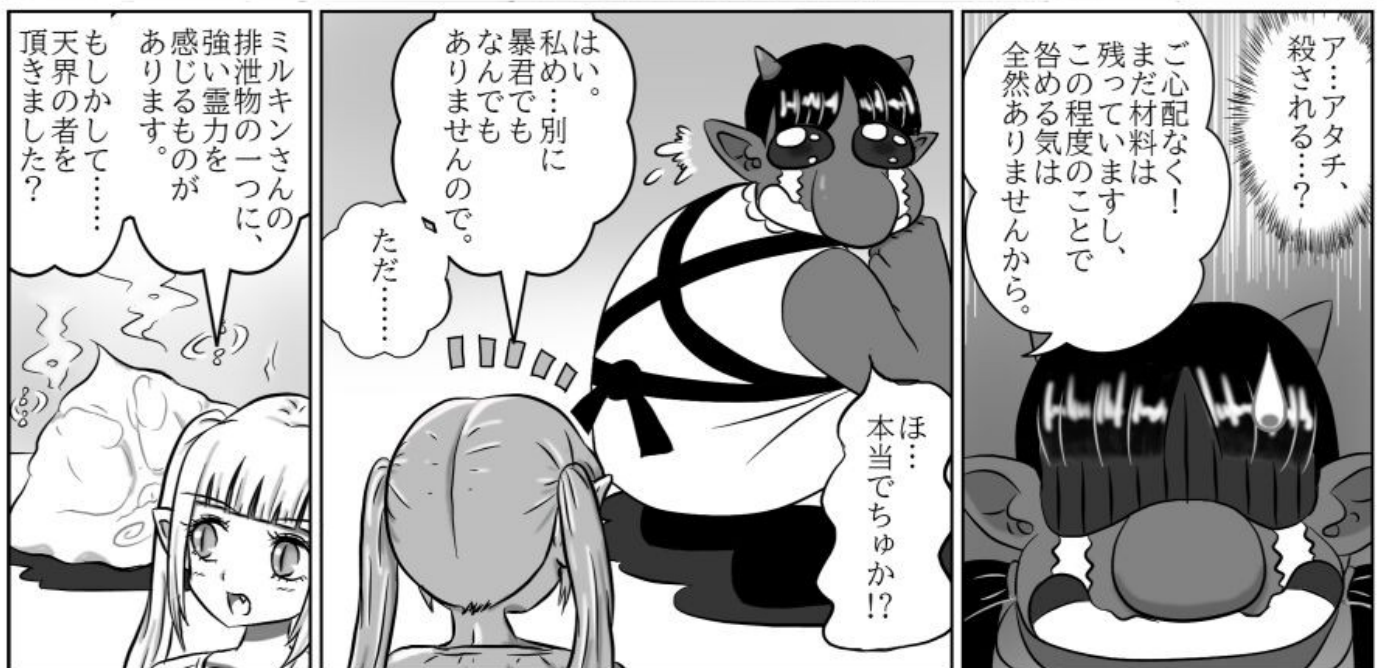




誰がドレスに  
なったのか?  
当ててね♡











## 用語解説

### ○パーピーヤス

最凶の魔族マアラの魂を宿した人間…茶和麗華が作り上げた組織。  
一部の魔族、邪霊、精霊、怪物などで構成され、全界（天界、魔界、地上界、冥界）の征服を目論んでいる。

### ○未確認生物

神田川県丘福市を中心に、ある時急速に出没し始めた正体不明の生物たちの仮称。  
多くが人間に危害を与え、中には人間を食らう者もいる。その殆どはパーピーヤスの組織下にある。

### ○マゴット

魔界の四大魔王の一人であるベルゼブブの実娘。その戦闘力は父親にも引けを取らないと言われている。  
蛆姫の異名を持ち、女性の精神、肉体、排泄物まで、全てを好んで食する。  
魔族マアラの友人で、その魂を宿している茶和麗華のパーピーヤスに身を寄せている。

### ○ペコペコミルキン

魔界のスイーツ妖精『ペコちん』と北欧の人食い怪物『トロル』を合成して作った合成獣（キメラ）。  
数多のスイーツレシピを熟知している。語尾に「～っち」がつく。

### ○パーピーガール

パーピーヤスで生産されるクローン少女たちの部隊（オリジナル少女は不明）。  
雑務や諜報活動などを行うが、戦闘時にはカンガルー顔のような仮面（ヘルメット）と筋力を10倍まで引き上げる強化服を着用する。

### ○天使

天界から何らかの使命を持って各界で行動する者たちの呼び名。  
種族的には天界で暮らす一部の神族や精霊など。また戦闘力に秀でた者たちを天剣士とも称している。  
最近ではパーピーヤスを征伐するような動きを見せている。

### ○CCS(未確認生物対策係)

正式名称Cryptid coping squad。  
神田川県警が未確認生物を拘束、駆除するために警備部警備課に組織した係。  
白バイ隊員、銃器の扱いに優れた者、通信ネットワークのエキスパートなどで構成しているが、  
常人の20倍の運動能力を発揮できる強化服を着用した特殊機動隊員、『ターディグラダ・ガール』も所属している。



0:52



## 〈排泄物化合同本

参加者twitter

かんやん  
@kanyan\_bucket

節山伏  
@IjSftVsteWh1aIM

クズ。  
@kuzumaru\_

こじか  
@pray4deer

龍乃鳳樹  
@tatsuhoju

奈々澄  
@nanashinanasumi

四尾連あんな  
@shibire\_ana

ほうじ茶プリン  
@houjitpudding

安堂 捺  
@NutsAndPic

るりょうりに健山  
@ruryorini

奥付

誌名：排泄物化合同本  
発行：グレモリー邸  
発行日：2022年2月2日  
連絡先：nutsandpic@gmail.com

無断転載および  
18歳未満の購入・閲覧・所持を  
禁じます。